

真・転生無双　至高の武人伝

時語り

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

現世で死亡した北郷一刀は、とある理由から転生の道を選んだ。その世界で彼は、激動の中を生き抜いていく。武人として、生き残ったい一人の人間として。

【書き直し決定により凍結解除】

目
次

武人伝の始まり	1
修行開始	7
魂から	18
想う	28
拠点フェイズ01	38
覚醒	47
共に修行	61
旅へ	73
旅の出会い	83
熱男	93

武人伝の始まり

俺——北郷一刀の人生の終わりは呆氣ないものだつた。

冬の通学路で、信号待ちをしていた時のこと。

凍結した路面にスリップしたトラックにぶつかり、体を強く叩きつけられて死亡。

その際にトラックが妙な動きをしたように見えたが、気にしている瞬間は無かつた。

ぶつかって意識を失うまでの僅かな間に、俺の脳裏に家族や友人と日々が蘇る。

(これが……走馬灯つてやつか……)

これを最期に、俺の意識は永遠に途切れた。

その様子をどこかの異空間のような場所で、二人の男が眺めている。

「クククツ。これで奴は外史に行けん。忌々しい北郷一刀も、こうなつては形無しだな」

男の一人が一刀が死んだ姿に笑みを浮かべる。

対照的に、浮かない表情をしているメガネの男が話しかける。

「しかし、よかつたのですか？ 私達も一応は管理者。正史で生き死にに関わつたら」

「うるせえ。これまで悉く邪魔されてきたんだ、こうでもしなきや」「こうでもしなきや、なんじゃ？」

背後から聞こえた声に振り向くと、一人よりずっと大柄な男がいた。

カイゼル髪はともかく、何故かマイクロビキニのような服を着ている筋肉質の老人が。

「貴様、卑弥呼!?」

「管理者として、越えてはならぬ一線を越えてしまつたの。バレぬと思つておつたがあ！」

老人がそう呟くと、二人の足下に魔法陣が浮かぶ。

そこから放たれた紐状の光が二人を拘束し、魔法陣が輝きだす。

「な、なんだつ!？」

男の一人が抵抗を試みるが拘束は解けず、逆に力が抜けていく。

「管理者でありながら、正史で生きる人間を手に掛けるなど言語道断。揃つて報いを受けい！」

光に包まれた二人の体は徐々に消えていく。

メガネの男は観念したのか無抵抗だが、もう一人は消え去る瞬間まで抵抗する。

「くっそ！ くっそがあああああつ！」

二人の男が消え去った後、老人の姿も消え去った。

俺の意識は途絶えたはずだつた。

なのに俺は意識があつた。

「どうなつているんだ？」

あるはずのない、目が覚める感覚に疑問を抱き、恐る恐る目を開けてみた。

目の前に広がっているのは、暗い背景に鏡のような物が大量に浮かんでいる空間。

「これがあの世だとしたら、えらく殺風景だな」

立ち上がって鏡の一つを覗き込んでみると、そこには俺がいた。

ただ、鏡を覗いている俺ではなく、見知らぬ小柄な金髪の少女と歩いている俺がいた。

「はつ？ 何だこれ。こんな子、知らないぞ」

首を傾げながら隣の鏡を覗くと、褐色肌に桃色の髪の少女と共に娘をあやす俺がいた。

「いやいやいや。俺に子供いないし、この奥さんっぽい人も知らないし」

自分で自分に突っ込んでいると、後方から何かが近づいてくる足音が聞こえた。

猪か何かと思えるほどデカい足音に、嫌な予感を覚えながら振り向く。

するとそこには。

「ご主人様ああああああつ、お久あああああつ！」

マツチヨにパンツ一丁、スキンヘッドにもみあげだけ残し、三つ編みにしている巨漢。

しかも何故か女走りしているので、気持ち悪いことこの上ない生物が駆け寄ってきていた。

「ぬおおおおおりやああああああああ！」

なので俺は、容赦無く変態らしき人物の顔面に拳を叩き込んだ。

「ぶるああああっ！」

顔面を殴られたそいつは、後方に吹っ飛んで背中から倒れた。

クロスカウンター気味だつたとはいえ、よく吹っ飛んだもんだ。

「酷いわ、ご主人様。いきなり乙女の顔をグーで殴るだなんて」

「誰が乙女だ！ そもそもここはどこで、お前は誰なんだ！」

拳を握りしめ、唯一の情報源のそいつに怒鳴る。

「私の名前は貂蝉。ここは外史の観察室よ」

起き上がつたそいつの名前に、俺は耳と目を疑つた。

貂蝉といえば、三国志に出てくる絶世の美女だ。

それがこいつだとは信じられない。

「そうか、同姓同名の別人か」

思いついた事を口にすると、貂蝉と名乗つたおつさんが怒り出した。

「誰が見るに堪えない外見の変態おっさんかあ！」

「そんな事言つてねえ！」

勝手に暴走した貂蝉とやらに、渾身の右アッパーを浴びせる。
我ながら最高の一撃だった。

「ぶるああああっ！」

顎下から撃ち抜かれ、宙に浮いた貂蝉は頭から落ちた。

普通なら唯では済まないはずなのに、貂蝉は普通に起き上がつた。

出血の様子も無く、傷の一つもつかずに。

「今度のご主人様は、随分武闘派なのね」

「誰がご主人様か！」

お前みたいのを雇つた覚えも、仕えさせた覚えもない。

「で、外史つてのは何だ？」

「分かり易く言えば、並行世界でパラレルワールドよ」

そう言つて、貂蟬は説明を始めた。

曰く、そこは大抵三国志の世界から始まる。

主な人物が全員女性になつてゐる。

真名という初見殺しな風習がある。

必ずしも、俺の知つてゐる歴史通りに物事が進むわけではない。

その外史は悉く俺という存在を必要とし、別世界の俺もそれを経験している。

そして俺と外史の物語の終わりは、一つではないということ。

「じゃあ、あの鏡に映つてゐる俺は？」

「別世界のご主人様よ。自分の向かうべき外史に行つて、そこで頑張つてゐるわ」

先ほど俺が覗いた二つの鏡を手元に寄せ、その光景を見せてくる。

一方は傷のある少女と街を歩いている。

お茶をしていた眼鏡の少女と、ゴーグルを首に掛けている少女がそれを見て逃げ出す。

傷の少女は怒りながら二人を追いかけ、俺はそれを苦笑いしながら眺めている。

「このご主人様は、後に己の存在を賭けて大事な人を守ろうとするわ」
もう一方は娘に泣かれて落ち込む奥さんらしき女性を、忍者のような少女と慰めている。

すると忍者の少女そつくりの娘と、赤ん坊を抱いた片メガネに袖の長い少女もやつてきた。

「こつちのご主人様は悲しみを乗り越えて、新たな時代を担う子を育てててゐるの」

さらに追加で見せてくれた鏡では、三人の少女と桃の花の下で乾杯をしている。

「これはここ最近、始まつたばかりの外史ね。この外史の物語は、ここから始まるのよ」

説明に使用した鏡を元の位置に戻して、再び俺に向き合う貂蟬。

「この他にも、色々な人の処へ仕えたご主人様、自分で旗揚げしたご主

人様がいるわ」

「ふうん。でも、俺は外史とやらに行つてないぜ。というか、もう行けないよな」

だつて俺死んじやつたんだもんよ。

「そうなのよ。だから、ご主人様が行くべき外史が歪んじやつてね。困つてているのよ」

新たに手元に寄せた鏡が、俺が行くべき外史を映す鏡なのだろう。でも、そこには何色もの光が歪んでいるように見えるだけ。

人影も景色も何も見えない。

貂蟬が言うには、このままでは外史が暴走して、俺がいた世界と共に消滅してしまうのだという。

「ひよつとして俺がここにいるのは」

「そうよ。ご主人様には、この外史の過去に生まれ変わりという形で行つてもらいたいの」

生まれ変わりかよ。

要するに転生つてことか。

おそらく狙いは。

「そうする事で、元から俺がいることにして事態を回避しようつて事か」

思つたことを口にすると、貂蟬は満面の笑みを浮かべる。

笑顔なのに、ぶつちやけキモイ。

「察しがよくて助かるわ。ただ、三国志の歴史の流れの大半を記憶から消させて貰うわね。名前とか、多少の事は記憶に残しておいてあげるけど」

なるほど、歴史を知つての転生は何か弊害があるという事か。

普通そうだよな。

「何でもかんでも知つていたら、起ころる出来事に無敵状態だもんな。それで、行つてくれるかしら？」

「……分かつた、行こう。頼む貂蟬、俺を外史つて所に送つてくれ」

決心した俺は貂蟬に転生を頼んだ。

俺はもう死んだ身だけど、元いた世界がそれで救われるのなら。

それに三国志のパラレルワールドにも興味があるしな。

「分かつたわ。じゃあ、頑張つてねご主人様」

貂蟬が持つている鏡を俺に向けると、鏡から光が発する。

その光に包まれた俺の意識は徐々に薄くなり、やがてこの空間から消えた。

一刀が消えたすぐ後。

前触れもなく一人の男が現れた。

二人の男に罰を与えた、カイゼル髭に妙な格好の老人——卑弥呼が。

「お帰り。卑弥呼、首尾は？」

「バツチリじや。まだ正史にいまだりんを亡き者にした首謀者の二人には、管理者権限を剥奪し相応の罰を与えてきた」

卑弥呼の返事に、貂蟬は満足そうに微笑む。

「さあ、大変なのはこれからよ。ご主人様の行つた外史を安定させなきや」

「うむ。せつかくだりんが行つてくれたのに、過去から崩壊させては意味がないから」

そうして二人は作業を開始した。

それに合わせるように、鏡の中の歪んだ光が消え、ある邑の光景が映る。

一筋の流れ星が落ちた夜、邑に建つ一軒の家では出産が行われており、無事に一つの命が生まれた。

「よくやつたぞ！ 見ろ、元気な男の子だ！」

父親に赤ん坊を見せてもらつた母親は、愛おしそうに息子を見る。

「それであなた。この子の名前は？」

「呂迅だ！ この子の名は迅。そして真名は……一刀！ 一刀にしよう！」

こうして転生した北郷一刀の新たな人生が始まつた。

修行開始

外史と正史の歪みを直す為、転生の道を選んだ北郷一刀。

彼は呂迅という名で、再び生を歩み始めた。

しかし、一部を除き前世から引き継いだ意識と記憶はあつたが、ある重要な事に気付いた。

(そうだ。生まれ変わるつて事は、赤ん坊からやり直しじやねえか)
しつかり成長した意識があるので、体は赤ん坊なので思うように動けない。

喋る事も歩く事もままならず、あーとかうーとか言いながら両親に手を伸ばす。

周囲から温かい目で見守られる。

少しだけ鍛えられればと動き回っているので、好奇心旺盛な子だと

今になつて転生というシステムのデメリットに気付く一刀。
ただ、それ以上に気になつているのは。

(俺、どんな外見してんだよお!)

手足の色を見る限り、母親譲りの褐色肌のは分かる。
だが、髪が何色なのか、どんな顔つきをしているのか。

各家庭に鏡がある訳でもないこの時代では、知る事は困難だつた。

一刀がその疑問を解消したのは、数カ月後。

両親に連れられて付近の川に行つた時だつた。

天気も良かつたので上手い具合に水に顔が映つた。

(うお、今の俺は、こんな顔なのかな)

初めて見た自分の顔に若干の感動を覚える。

特に気になつたのは、目と髪の毛の色。

どちらも父相似の濃い赤色をしていて、例えるならば真紅。
おまけに触覚状に二本の髪が立つていて。
さらに脇腹や肩の辺りに刺青のような模様の痣。

言葉を発せないので、そこを擦つてこれは何かと両親にアピールす

る。

父親が言うには、うちは代々そういう癌がある家系なんだと、形状が違う自分の癌を見てくれた。

(なるほどな。これは遺伝か)

悪い病気じやないかと心配したが、特に問題無いと分かりホツとする。

それから更に月日が経つにつれ、一刀は自身の事を考えるようになっていた。

(俺、誰の下で働くかな。それとも自分が旗揚げするか……)

貂蟬の説明によると、一刀は三国志の主要人物の傍にいるか、自分で旗揚げをしている。

となると当然、自分もそうなる可能性が高いと考えた。

(劉備か曹操か孫堅か、はたまた別の所か……)

どこに所属しようが、旗揚げをしようが、絶対的に必要になるのは武か智。

転生なので知識はあるが、それはあくまで未来の知識。この時代で役立つかは分からない。

武官か文官か、どちらか一方に絞れず五年が過ぎた。

一刀は暇があれば木の枝を剣代わりに振るうか、本を読んでいるかをするようになった。

両方を極めるという考えも浮かんだが、世の中はそう甘くないと自分を律する。

その一方で周囲は、五歳で本を読んでいる事や、剣術の真似事をしているのを見て、将来は文官か武官かと暢気に騒いでいる。

「そろそろ、どっちかにしないとなあ」

悩んでいる一刀に決断をさせたのは、翌月のことだった。

同じ邑に済む叔父夫妻の間に、一刀にとつては従妹にあたる娘が生まれた。

両親と共に叔父の家を訪れ出会ったのは、自分と同じ真紅の髪と瞳の女の子。

褐色肌に痣があるので、親類というのが一目で分かる。

「ほら、呂迅も抱いてごらん」

スヤスヤ眠る従妹を母親から受け取り、一刀は思つたより重いなと驚く。

だが、驚いたのはこの女の子の名前だつた。

「それで、あの子の名前は？」

「呂布だ。真名は恋にしたよ」

「!?」

思わず声を上げそうになつたのを堪え、腕に抱いている女の子を見る。

(こ、この子があの呂布!?)

勿論、一刀の知る呂布にも子供時代があつたのだから、想像しにくいのは仕方が無い。

しかし、今一刀の目の前にいる呂布こと恋は。

「あー、ううー」

眠りから覚め、自分を抱いている一刀に手を伸ばし、顔にペタペタ触れながら満面の笑みを浮かべている。

(こんな、こんな可愛い従妹を戦場に立たせるかあ！　いや、立たせてしまつたとしても、俺が守つてやる！)

これが一刀が武の道を歩み始める切っ掛けだつた。

後に至高の武人という名を残す男の武人の道は、ここから始まる。理由がシスコン魂とは綴られずに。

武の道を進むと決めた一刀は、早速父親に相談した。

誰か武を教えてくれる人はいかないかと。

すると父親は、昔とつた杵柄で自分が鍛えてやろうと言い出した。

「……本気で言つてるの?」

「当たり前だ！」

普段は邑で鍛冶屋をやる傍ら、時には破損した人家や家畜小屋も修理している父親。

その父親は若い頃、とある太守に仕えていた武人だつたらしい。賊の討伐の際に脚を大怪我し、それが元で武の道を捨て、鍛冶屋で

修行して故郷に帰つて来たそうだ。

「言つておくが、俺は厳しいぞ」

「上等！」

この一言で修行が決定した。

だが、この時の一刀の年齢は僅か五歳。

どんなに才能があろうとも、碌な事はできない。

なので。

「さあ、頑張つて走れよ」

「ぬあああああっ！」

父親が課したのは徹底した基礎体力作りと体作りだった。

武器の指導は一切せず、仕事で使う槌を振らせたり、山の中を走らせたり。

付近の街へダッショウで買い出しに行かせたり、ご近所の農作業を手伝わせたり。

とにかく普段の生活の中で体を動かさせ続けた。

特に仕事が無ければ、迷わない範囲で山の中を走らせ続ける。

「ほらほら、動いてないと死ぬくらいのつもりで動け」

「どおりやああああああっ！」

徹底した基礎トレーニングの繰り返しは、体力的にも精神的にもキツイ。

理由は成果が目に見えにくいからだ。

自分で手ごたえを感じなければ、同じことの繰り返しに嫌気が刺す。

それが挫折のきっかけにもなるのだが、一刀はこれに耐えていた。

（恋のために強くなるんだ。せめて呂布と同じくらいにならなくちゃ）

目標は従妹である恋を守ること。

三国志で最強クラスの呂布を守るという、途方もない目標が一刀を支えていた。

どんなに鍛えても足りないと自分に言い聞かせ、基礎トレーニングを続ける。

体力的にも精神的にも、大きく成長しているとも気づかずに。

勿論、疲れきつて倒れる事もあつた。

そんな時には大抵、付近で遊んでいた恋が歩み寄つて来て。

「にい、お疲れ様」

と、まるで天使のような微笑を見せる。

するとさつきまでの疲れが吹き飛び、また走り出すことができた。

「やつてやらああああああ！」

こうして、徹底した基礎トレーニングを日々積んでいく一刀。

気づけば五年が経過し、一刀は十歳になつた。

長きに渡る基礎トレーニングのお陰で、体つきは十歳にしては鍛えられて いた。

がつちりと引き締まっている体に無駄は無く、時間をかけて適確に鍛えてきたのがわかる。

これほど鍛えたのなら、そろそろ本格的な修行が始まらんだろう。

そう思つていた一刀だつたが。

「すまん、これ以上は俺には無理だ」

本格的な修行を切り出した一刀に返つてきた父親の言葉は、謝罪の言葉だつた。

「はつ？ 何で？」

「お前の才が俺の想像を遥かに越えているからだ」

父親曰く、一刀の武の才が凄まじすぎて、引き出せる自信がなのだと いう。

「正直言つて、これほどとは思わなかつた」

自分の奥にある真の強さを得るには、相応の土台作りが必要。

作り上げた土台は、その人が持つ強さを受け止めるもの。

なので、作り上げた土台の大きさこそがその人の持つ強さの大きさ。

そういつた考えを持つて一刀を鍛えてきたが、一刀の土台の大きさは想像以上だつた。

「お前の持つ土台は大きすぎる。言い換えれば、それだけの武の才を秘めている。しかし、情けない話だが俺にはとてもそれを引き出せる

自信が無い。おまけにまだ土台が大きくなる可能性がある」

要するに一刀の才能を引き出すには、父親では役者不足だという事だ。

「じゃあどうするのさ」

「ここまで来て武人への道を諦めるつもりは毛頭ない。

当然、父親もそのことは察しており、既に次の手を考えていた。

「そこでだ。お前、ここに行つてこい」

差し出されたのは木管による紹介状と、木札に書かれた行き先。

「ここ」の太守様は、以前俺が仕えていた方で武にも深く精通している方だ

「つまり、この人に紹介状を渡して鍛えてもらえって事?」

「そういう事だ」

腕を組んで頷く父親と、手元の紹介状と木札を何度も視線が往復する。

これを受け取れば、何年かは帰ることができない。

両親ともそうだが、恋に会えなくなる。

かと言つて、まだ五歳の恋を連れて行くわけにはいかない。

会えない間に呂布として目覚めるかもしれない。

だが、それは武の道を行くと決めた時から覚悟していた事。決断した一刀は、紹介状と木札を手に取つた。

「いつてきます」

「うむ。気をつけてな」

翌日、旅立つ一刀を見送る為に邑の人達が集まつた。

その中には当然、恋の姿もあるのだが。

「恋、いい加減にしなさい」

叔父に説得されながら、恋は何度も首を横に振る。

「やだ。にい、行かないで」

涙目で服の裾を掴む恋。

あまりに可愛らしいその姿に、旅立つ決心が揺らぎかける一刀。

それでもどうにか堪え、頭を撫でてやりながら恋を諭す。

「大丈夫だよ、恋。きっとまた会えるから」

「……本当?」

涙目で尋ねる恋の涙を拭つてやり、頭を優しく撫でながら返事をする。

「本当だ。約束するよ」

「……ん」

約束を交わして笑顔を見せると、ようやく恋の手が離れる。

解放された一刀は邑の人々に見送られ、手を振られながら旅立つ。最後まで手を振っていた恋は、涙ながらに一刀を呼んでいた。

「にいー！」

その声に最後まで振り向かなかつたが、右腕を高く掲げて返事をした。

目的の街へ向けての旅は決して楽ではない。

飲み水が無くなりかけたり、森で獣に追いかけられたり。

商人の荷車に乗せてもらつたら、盗賊に襲われそうにもなつた。

そんな数々の苦難を乗り越え、遂に一刀は目的地である益州は巴郡に辿り着いた。

「やつと着いた……」

辿り着いた街の門の前で、一刀は無事に到着してホツとする。ゆつくりと深呼吸して、表情を引き締め街へと入る。

街の中を歩きつつ、一番目立つ建物である城へ向かう。

割と活気のある街を見ると、良い人が治めているのだと分かる。

そんな人の下で修行かと思うと、一刀は胸の高鳴りを押さえられなかつた。

「すみません

城門前に到着し、番をしている兵士に声を掛ける。

「何用だ」

「こちらを太守様に渡していただけませんか?」

父から受け取つた紹介状を兵士に手渡す。

兵士は検閲の旨を一刀に伝え、承諾を得て木管を開く。

それを読んでいくうちに兵士の表情が驚きに代わり、すぐさま一緒に番をしていた兵と相談を始めた。

「じゃあ、頼むぞ」

「はっ！」

紹介状を手にしていた兵士は城内へ走つていき、もう一人の兵士が一刀に話しかける。

「しばらくこちらでお待ちください」

「分かりました」

指示に従い、荷物を降ろしてその場で待つ。

兵士と世間話をしながら待つていると、先ほどの兵士が女性と数人の兵士を連れて来た。

先頭の女性を見た目の印象だけで例えるなら、胸と生脚の素晴らしい威勢の良さそうな姉さん。

「この紹介状を持つてきたのは儒子、お主か？」

女性が差し出したのは、先ほど兵士に渡した紹介状。

間違いなく一刀が渡したものなので、肯定の返事をする。

「はい、確かに俺が持ってきたものです」

「分かった。こっちへ来い」

紹介状の持ち主を確認した女性は、兵士を見張りに戻して一刀を連れて行く。

部屋。

やがて到着したのは、軍議にでも使うのか複数の椅子と長机のある部屋。

掛けた。

「よくぞ巴郡まで来られた、呂迅よ。この紹介状、しかと受け取った」
よほど位置にいると思われる女性は、紹介状を掲げて一刀に見せる。

「じゃが、ちと困ったのぉ」

「どうかされたんですか？」

紹介状の内容に何か問題があつたのかと、故郷にいる父に不安を感じる。

ところが、問題は一刀の側ではなく相手側にあつた。

「実はお主の父が紹介状を宛てた先代太守、我が父は既に亡くなつて

おるのじや

「えつ……」

頼りにして いた人物の死去とい う言葉に、一刀は目の前が真つ暗になつた。

「太守の職そのものは、娘の私が継ぐ事になつたのじやが。さて……どうするか」

「はあ……」

落ち込む一刀の様子に、悪いと思いつつも死んでいるのでは仕方ないと割り切る。

とりあえずこのまま帰すのも悪いと思い、軽く武の触りでも教えてやるかと一刀を眺める。

「……む？」

しばしじつと眺めていると、女性の目にあるもののが映る。それは一刀の奥に秘められた武人としての気。

紹介状には、武に関して大きな才を秘めているとあつた。親が故に誇張して書いたのかと気にしていなかつたが、じつくり見て考えが変わつた。

(なんじや、こやつは……)

これまでに見てきた父親の部下、仕事仲間、そして上司。

そういった人物を見てきた女性の目は、通常よりも人の目利きができる。

その目で見た一刀に秘められた力は、あまりに大きすぎて眩暈がするほどだつた。

「くつ……」

「どうされましたか？」

「いや、なんでもない」

ゆつくりと呼吸をして眩暈を抑える。

改めて一刀から発せられる氣を見ると、大きすぎると同時に小さく見えた。

一見すれば、まるで無害な小動物のような見た目。しかしその奥には。

(これはなんとも凶悪な狼……いや、熊か。いや、それ以上の!?)

まだ器だけの状態だけに、力量を計りかねる。

もしも鍛え上げたらどれほどのものになるのか。

太守としてではなく、一人の武人としての血が騒ぐ。

戦つてみたい。

この巨大な器だけの少年を自分の手で鍛え上げ、戦つてみたい。
多分勝てないだろうと思いつつも、武を身につけている者としての
血が抑えられない。

(面白い！ その毛皮を引き裂いて、隠れているものを引きずり出して
くれる！)

己が本能に従う事に決めた女性——厳顔は沸き立つ武人の血を抑
えて一刀に告げた。

「お主さえ良ければ、我が父に代わってわしが鍛えてやるぞ？」

「本当ですか!?」

一刀からすれば地獄に仏。

故郷にとんぼ返りかと思つていただけに、拒否する理由は無かつ
た。

「本当じや。言つておくが、辛いぞ？」

「百も承知です！ よろしくお願ひします！」

「良からう、我が名は厳顔！ お主の名は？」

「呂迅！ 姓は呂、名は迅です！ よろしくお願ひします！」

厳顔の声に負けず劣らず、大きな声で名を告げる一刀。

それすらも気に入つた厳顔により、一刀は武官として弟子入りする
こととなつた。

早速、鍛えた基礎力がどんなものかを調べるための試験が始まる。
仕えている兵士達と比べるため、調練を兼ねての基礎訓練。

最初は一刀が子供なので舐めていた兵士だが、訓練が始まると後悔
した。

楽勝だなんて思つていた自分達が馬鹿だつたと。

城壁外周十周走では、スタートから飛ばすのですぐにバテると思つ
た。

ところがバテるどころかスピードが上がり、半分の五周目で周回遅れが出た。

その後もどんどん周回遅れの兵士が続出。

一刀が十周終わる頃には、全員が周回遅れになっていた。
しかも当の本人はまだ余裕綽々といった雰囲気で、待つていてる間は腕立て伏せをして暇つぶしをしていた。

「なんと……」

続いては鎧や槍などを全て装備しての短距離全力疾走三十本。
大体の兵士は五本もやれば息が切れてくる。

ところが一刀は息が切れるどころか、スピードが全く落ちない。
流しているという憶測も飛び交つたが、一緒に全力疾走している兵士達は常に全力疾走。

それよりも速く駆け抜けているので、疑いはすぐに消え去った。
「これほどとは……」

その後の基礎調練でも、兵士達をぶつちぎる成績を残した一刀。
結果、誰にも文句を言わることのない成績で、一刀は兵士達に迎えられた。

「親父殿……。親父殿の元部下はとんでもない息子を送り込んできた
かもしけんぞ」

今は亡き父親から、最高の置き土産を貰つた気分で呟く。
絶対にこの弟子を一人前に育て上げると、心に誓いながら。

魂から

一刀が厳顔に弟子入りし、あつという間に一年が経過した。

この一年の間に武器を使っての修行が開始され、与えられた仕事と共に励んできた。

時には厳顔の傍につき、実際の賊退治を自分の目で見た。人が死んでいく様を初めて見た一刀は、人知れず嘔吐を繰り返す。いずれは自分もああいう場所に立つのだと、覚悟をしながら。

その覚悟を持つて、今日も修行に励む。

「だああああつ！」

「ふつ！」

一刀の繰り出す剣戟を厳顔が同じく剣で払う。

彼女が使う本来の武器は剣ではないのだが、本格的な修行を始めて一年やそこらの一刀の相手をするには充分だった。

「ほい！」

「うわっ！」

斬撃を弾いてやると一刀はよろめき、その隙に胴を突かれて負けた。

「ああ、まだまだだなあ」

「当たり前じや。そうそう簡単にわしがやられるか」「ですよねえ」

厳しい指摘に一刀は苦笑いをして頭を搔く。

しかし、実際のところ厳顔は驚いている。

まだ指導を始めて一年だというのに、そこらの将に僅かに劣るぐらいいには戦えているからだ。

(正直、生半可な奴では相手になるまいな)

実際、訓練での兵士との勝負はぶつちぎりでトップの戦績を誇つている。

戦い方はまだまだ拙く、荒っぽいところはあるが、持つている素質は本物。

だからこそ、厳顔はある事が気になつた。

「呂迅よ。お主、この一年で剣や槍を振るい、弓を射つてみてどうじや
?」

気になつた事とは、武器との相性。

剣や槍、弓といった基本的な武器は扱わせてきたが、どうも一刀との相性がイマイチに思えていた。

「……正直、どれもしつくりこないです」

「そうか……」

剣も槍も弓もしつくりこない。

それが一刀の解答だつた。

予想の範囲内の解答に厳顔は腕を組んで悩む。

どんな武器が一刀に合うのだろうと。

そこで一つ考え方を変えることにした。

「呂迅よ、想像して本能的に感じてみよ。自分がどんな武器を使い、どんな風に使いこなすのか」

まずは自分の戦い方を想像させる。

その中で自分に最適と思われる武器を想像する。

頭や理屈ではなく、心の中を探させようというのだ。

目を閉じた一刀は、自身のやりたい戦い方を思い浮かべる。想像の中で繰り出す動きは武器と体術を組み合わせたもの。体術で戦う為、腕には手甲が装備される。

そのまま何の武器と組み合わせたいのか、考えずに感じる。やがて辿り着いた武器は。

「これだ!」

目を開いた一刀は、鍛錬用の剣をもう一本追加する。

さらに二本の剣を逆手に持ち、構えを取る。

「ほう、逆手の二刀か」

「そうです! これが心の中を探して辿り着いた、俺の武器です!」

「ならば、見せてもらおう!」

どういつた動きを想像したのか見るために、厳顔は剣を振り上げて切りかかる。

「はい！」

迎えうつ一刀は剣を十字にして受け止め、がら空きのボディへ膝蹴りを向かわせる。

「ほう？」

咄嗟に後退して回避した厳顔に、今度は一刀が接近。まるで回転するかのような体捌きで、左右の剣と蹴り技を次々と打ち込む。

「おっ、おっ!?」

それらをどうにか捌き、避けてはいるが、先ほどよりずっと動きがいい。

まだ慣れていないからか動きが荒いものの、比べるまでもなく良くなっている。

武器を変え、自身の目指す戦い方を自覚するだけでこうも違うのかと、厳顔の表情に笑みが浮かぶ。
(楽しい、楽しいぞ！)

ここ最近感じなかつた、戦つていて楽しいと思える感覚。

それをずっと年下の少年が、しかも今さつき思いついたばかりの戦い方で感じさせてくれている。

「ふつはつはつはつ！　いいぞ、呂迅！　もつと打ち込んでこい！」

「はい！」

師からの求めに応えるかのように、動きの鋭さが増す。

動きはより滑らかに、無駄を少なく、次の動作がさらに次の動作に繋がっていく。

その攻撃を間近で見ている厳顔は、この攻撃に嵐や竜巻を感じた。相手に反撃の余地すら与えぬ凄まじい連続攻撃。

しかもその一撃一撃が全て必殺の攻撃。

これを完成させ、鍛え上げたらどうなるのか楽しみになってきた。

(もつとも、今はまだ未熟！)

連続攻撃の中にある隙を突いて反撃に転じると、そこからは厳顔のペース。

立て直す術をまだ持たない一刀は反撃に対応しきれず、負けてし

まつた。

「ああ、くそ！　いい感じだつたのに」

「はつはつはつ。確かに良い感じじやつたが、まだまだ未熟。さらに
精進せい」

「はいっ！」

未熟な弟子にそう言い残し、去つていく厳顔。

だがその表情は、とても楽しそうだった。

隙は戦つている間にいくつもあつたが、あえて反撃せずに戦いを楽しんだ。

まだ若干の物足りなさはあるが、これまでの飢えを補うには充分だつた。

「はてさて、あ奴がどう化けるか楽しみじやの」

上機嫌で城内へ戻り、弟子の成長記念と自分に言い訳して酒を手にする。

誰にも気付かれぬように自身の執務室まで持ち込むと、周囲を確認して扉を閉める。

封を開いてたっぷりと杯に注ぎ、いざ飲もうというタイミングで。「仕事中に何やつているんですか、師匠！」

先ほどまで手合させていた一刀が、執務室へと突撃してきた。

「むお！　ななな、なんじや呂迅！」

「なんじや、じやないでしよう！　まだ仕事中なのに酒なんて飲んで！」

「いいい、今は仕事中じやない！　休憩、お主を指導後の休憩じや！」
「どうしても、隠れて飲むのはともかく、執務室で飲むのは部下に面目が立ちませんよ！」

そう言つて、慌てふためく厳顔から酒と杯を奪い取る。

「ああ、何をするんじや」

「文官長さんから聞いていますよ。今日までの仕事が山ほどあるつて！」

「なつ！　あいつめ、何も呂迅に言わづとも」

「まったく、目を離すとすぐこれなんですから！」

ブツブツ文句を言う厳顔を放置し、一刀は酒を手に退室。
それに気付き、慌てて後を追う。

「待てえ！ 仕事はちゃんとするから酒を置いていけ！」

「断ります！ 他に止め役がいないので俺がしつかり止めるんです！」

いつの間にか、大酒飲みの師の飲酒止め係も兼任していた一刀。
彼のお陰で以前より仕事のペースが二割ほど改善された。

「くつ。じゃが甘い、ここに隠し酒が」

以前、部屋の中にこつそり隠していた酒を取り出そうとする。
こういう時に備えての隠し酒だつたのだが。

「ん？ 無いじゃと?!」

隠していた場所に酒は無い。

代わりに置かれていたのは竹簡。

手にとつて開いてみるとそこには。

『本日の仕事が終わるまでお預かりします。今日中の仕事が全部終わ
らなかつた場合、兵の皆に差し入れという事で振る舞つておきます
呂迅』

「あ、あの鬼弟子がああああああつ！ というか、何でわかつた
ああああああつ！」

文の内容を読んだ厳顔は席について仕事を始める。

一刀と厳顔。

彼らの師弟関係は武の鍛錬か机仕事かで逆転している。

なお、酒はどうにか仕事を間に合わせ、無事に奪還したそうな。

一刀が自身の戦闘スタイルを見つけ、さらなる修行を積み始めて
数カ月後。

厳顔は初めて一刀を戦場に放り込んだ。

相手は近隣の邑を襲っている盗賊。

この戦いで、前世も通じて初めて人を殺めた。

討伐後、その感覚を忘れられない一刀は厳顔の部屋に呼ばれた。
「どうじや。己が鍛えた武で初めて人を殺めた気分は」

「……重いです。言葉で表せないぐらい、色々と重いです」

「そんなところじゃろう。じゃが、わし的には充分合格点じゃ」

椅子から立ち上がった厳顔は、そつと一刀の頭に手を置く。

「人を殺めた後に、獸にならず人として踏み止まつた。それで充分じや」

他人を殺めたショックで気が触れる例は少なくない。

實際、そうなつたがために盜賊等に身を落とした者も多くいる。

彼女が今回一番見たかったのは、一刀が踏み止まれる側の人物かどうか。

もしも踏み止まれなければ、師として引導を渡す覚悟もあつた。
しかし一刀は踏み止まつてみせた。

「忘れるな呂迅。これが武人として越えねばならぬ壁じや。いかに鍛えようとも、誰かを守ろうとも、武とは人を殺めるもの。それを自覚して道を外れぬ者を、武人というのじや」

強さと暖かさを兼ね備えた言葉に、ヒビの入りかけていた一刀の心が癒える。

「分かりました」

ほつと息を吐きながら、引きつりかけていた表情が緩む。

その様子にもう大丈夫だと思った厳顔は手を引く。

すると一刀は、ある決意をした。

「師匠」

「なんじや？」

「俺の真名は一刀です」

ここまで自分を鍛え、導いてくれた相手への信頼。

それを真名を預ける事で伝えたい一刀。

弟子入りの際に預けようとも考えたが、師と弟子である以上は厳しくあつてほしかつた。

師である厳顔を信頼していない訳ではなかつたが、その信頼が甘さを生む可能性もある。

なので、今日までお互に真名を預けずに師弟関係を続けてきた。
それがいきなり真名を預けられ、厳顔もポカンとする。

しかしすぐに表情は笑みに変わり、互いに信頼してもいい時期かと判断した。

「わしの真名は桔梗じゃ。まつ、どうせ帥匠としか呼ばんじやろうがな」

一刀に同じく真名を預ける事で、桔梗は同等の信頼で返した。
真名を預けあつても、修行に甘さを生むことは無いという、確信と信頼の下で。

「ありがとうございます、桔梗師匠」

「はつはつはつ。そう返すか、よかろう。では戻つたばかりですまないが、あいつを頼めるか？」

桔梗が窓の外を見たので、同じように窓の外へ目を向ける。

外には、体育座りをしてボンヤリしている少女がいる。

白と黒の特徴敵的な二色の髪を持つこの少女は、先の盜賊退治の際に保護した。

故郷と家族を賊に襲われて失い、たつた一人生き残り、行き場を失つて死んだ目をしていた。

ここまで連れて来たものの、ああやつてボンヤリするだけで何もしようとしない。

「やれるだけやつてみます」

自分にどれだけの事ができるだろうか。

不安になりつつも一刀は少女に歩み寄る。

少女は反応一つせずボンヤリと虚空を見つめ、時折両親の事を小声で呟いている。

「父様……母様……」

虚ろな目で無表情のままブツブツ言っているので、傍から見れば危ない子に見える。

「……隣、座るよ」

「……」

一刀が隣に座つても無反応のまま俯いている。

顔見知りなら一発叩いてでも正気に戻すのだが、相手は初対面のしかも少女。

むやみに叩く行為は一刀にはできない。

しかもこの少女を助けたのは、他ならぬ一刀自身。

両親が目の前で殺され、少女にも刃が向けられていた所を救つた。

そして少女に刃を向けた相手こそが、一刀が初めて殺した人間。

初めて人を殺し、荒い息遣いで佇む血塗れの姿。

それを見て震える少女を見たからこそ、人殺しの感覚に呑まれずに済んだ。

「あの……？」

「……」

「君のこれからのことだけど……」

「……せ」

今まで無反応だった少女が初めて反応を見せた。

しかし、とても喜べる反応ではなかつた。

彼女がようやく喋った言葉が。

「私を殺せ」

だつたからだ。

「親類もいない、友人も親も全部失つた。どうせなら、あのまま死にたかつた。そうすれば、あの世で皆と一緒にいた。だから、今からでも私を皆の処へ送つてく——」

死んだ目でネガティブ発言する姿に、叩かずにはいられなかつた。

先ほどまで叩く事はできないという理念を捻じ曲げ、一刀は少女の頬を平手打ちした。

少女は平手打ちされた頬を押さえ、キヨトンとしている。

「ふつざけんな！」

一刀は少女の胸倉を掴んで引き寄せ、怒鳴りつける。

「ここで殺したら、俺は何のためにお前を助けたんだ！ 何のためにこの手を血に染めたんだ！ お前を庇つて死んだ両親に何て言えばいいんだ！」

次々と出てくる怒りの籠もつた言葉。

その一つ一つが少女の心に突き刺さり、押さえ込んで塞いでいた蓋に穴を開ける。

遠慮がないからこそ、問答無用に蓋を壊していく。

少女も、命の恩人に言うべきことでは無いのは分かつていた。

それでも、悲しくて寂しくて辛くて、それしか言う事が思い浮かばなかつた。

「全部失つた？　だつたらまた一から探して手に入れろ！　そして死んだ友人や家族に見せてやれ！　新しい大切な人はこんな奴だつてな！」

蓋をブチ破つた一刀が少女の中に入り込む。

暗い中で蹲つている少女に手を伸ばし、掴んで光の下へ引きずり出す。

「自分の足で立てえ！　這つてでも前へ進んで、生き残つた意味を探してみやがれ！」

最終的には乱暴な言葉遣いで言いたい事を言い切り、息を切らす。未だに胸倉を掴まれている少女は一刀の手に触れ、そつと放される。

解放された少女は空を見上げる。

両親と一緒に何度も見た、青い空が広がつていて。

（生き残つた意味……新しい大切な人……）

生き残つた意味は分からない。

でも、大切にしたい人はたつた今できた。

（探して……いや、もうここにいるよ。父様、母様。私が大切な人にしてたい男が……）

空に向けていた顔を下ろして一刀を見つめる。

命の恩人で、進むべき道を示してくれた人物を。

そしてある決意を固める。

「……そういえば、名乗つていなかつたな。私の名前は魏延だ」

「俺は呂迅。こここの武官で太守である桔梗様の一番弟子だ」

お互の名前を教えあうと、ようやく魏延の表情が柔らかくなる。死んでいた目が生き返り、光を取り戻した。

思い直してくれたかと、ほつと胸を撫で下ろす。

ところが、ここで一刀にとつて予想外の事態が発生する。

「ならば、私は二番弟子になろう」

「えつ？」

いきなりの弟子入り宣言に、ほつとしたのも束の間、一刀の思考がフリーズしかける。

「……何で？」

「私は決めた。命の恩人である呂迅！　お前の背中を守れる武人になるとな！」

声高らかに宣言して一刀を指差す。

どういう事かは一刀には理解不能だが、彼女は生きる意味を自分に見出したのは理解した。

だが、肝心の思考が鈍くなつたままなので、反応が追いつかない。

「はつ？　えつ？」

突然の事態に頭の処理が追いつかない一刀は、首を傾げながら疑問符を浮かべる。

「心配するな！　これでも武官に憧れて、武芸は少しだけだが教わつていた！」

「いや、そうでなく

「そうと決まれば太守様に弟子入りしてこよう！　厳顔様！」

訳が分からず立ち尽くす一刀を放置し、嚴顔の下へ駆け出す魏延。

突然部屋に押しかけたので怒られはしたが、見所があると言われ弟子入りを認められた。

こうして一刀にとって、後に相棒と呼べる少女が仲間に加わることになった。

想う

新たに魏延が仲間に入つて約二年が経過した。

元からの素質もあり、この二年で魏延はメキメキと腕を上げていた。

兄弟子の一刀や師の桔梗には及ばないものの、自慢の怪力で振り回す鈍碎骨での戦いは迫力満点。

「だああああっ！」

今も、討伐対象の盗賊をぶつ飛ばしている。

ぶつ飛んだ賊の腕は見事に骨が砕けており、武器の名前に恥じない威力を発揮していた。

そこらの賊では彼女には相手にならない。

しかし、それ以上に賊程度では相手にならないのが。

「だりやああああっ！」

自身の戦い方を身に着けた一刀だつた。

まるで嵐が通過するかのような戦いを見せ、周囲にいる複数人が同時に宙に舞う。

逆手に持つた二刀と体術を自在に操り、敵を全く寄せ付けない戦闘を展開している。

その様子を指揮官として見守っている桔梗は、指示を出しながら満足そうに戦況を見ていた。

「ふつふつふつ。焰耶はまだまだじやが、一刀はかなりの猛者に育つたのぉ」

これだけ育つてくると、武人としての血が騒がずにはいられない。太守である前に一人の武人である桔梗は、一刀が育つのを二つの意味で楽しみにしている。

一つは純粹に師と弟子として。

もう一つは、自分が戦つてみたいから。一刀の武の才覚を認めている桔梗は、いずれ自分が追い越されるのは自覚していた。

ただ、追い越した後はどこまで行くのか。

その強さを身を持つて知つてみたい、そういう気持ちを常に持つている。

最近では鍛錬の手合わせでも、桔梗本来の戦闘スタイルを相手に互角に戦えている。

ちなみに焰耶とは、一刀と桔梗に預けた魏延の真名のこと。

(おそらく、一年後くらいには圧倒的に追い越されるじやろうな)
強くなるとは確信していたが、あの年でここまで育つとは思つてもみなかつた。

(……追い抜かれた後、わしはどう一刀と付き合うか)

弟子はいずれ師を追い抜くもの。

それは分かっていても、抜かれた後の一刀との関係を考えていなかつた。

抜かれた以上は師弟として付き合うつもりはない。

お互いに一人の武人として向き合うか、それとも新しい関係に発展するか。

無事に盜賊を退治した一刀達が戻り、城への帰りの道中はずつとその事を考えていた。

一応、自分が新しい関係を求めているのには気付いたが、それは少々迷ってしまう関係だった。

「という訳での、どうすれば良いと思う紫苑」

「珍しく真剣な表情をしていると思つたら、そういう事だつたのね」「珍しくは余計じや！」

討伐から戻つた桔梗は、古い友人の一人である黄忠に相談をしていた。

彼女は益州を治める太守の劉璋配下の武人で、今日は仕事の関係で巴郡に来ている。

立場上は黄忠の方が少し上なのだが、特に気にせず友人として対等に付き合っている。

「それで？　ずっと考えても分からぬから、私に相談しているのね？」

「そうじや。文句があるか？」

椅子の背もたれに体重をかけ、開き直つてふんぞり返る。

「ええ、あるわね。桔梗らしくない、馬鹿みたい。いえ、今のあなたは

桔梗という名の馬鹿ね」

微笑んで毒舌をかます友人に、桔梗は前のめりになつて反論する。

「そこまで言うか!？」

「言うわよ。いつも自分の気持ちに素直なあなたは、どこに行つたの？　どうしたいかなんて、あなたの気持ち一つじやない。これまで通りにそれに従えばいいのよ。あなたの考えた新しい関係に、なつちやえばいいじやない」

言いたい事を言い切り、侍女が用意してくれたお茶を啜る。

茶碗を置いて桔梗に視線を戻すと、桔梗は俯いて微かに震えていた。

顔を微妙に赤くしながら。

「どうかしたの？」

「……うむ。むつ？　ちようどいい、ちよつと見てみろ」

迷つっている様子の桔梗が外に何かを見つけ、黄忠に見るよう促す。促されるままに外を見ると、報告書を書き終え提出した一刀と焰耶が、武器を手に素振りをしている姿があつた。

「今の話に出た弟子というのは……あやつ、一刀のことじや。会つた事はあろう？」

「ええ、こつちに来るたびに会つているわ。なかなか将来が楽しみな男の子じやない」

初めて会つたのは焰耶が仲間になつて間もなく。

今回と同じく仕事の用事で来て、一番弟子だと桔梗に紹介された。

以来、何度か顔を合わせ、時には手合させをしたりもしていた。

「今は十三なのじやが、わしを圧倒的に追い抜くであろう二年後には元服じや」

「そうね。それで？」

「……想像してみよ、師である自分を完膚なきまでに倒した二年後の奴を」

言われるままに想像する黄忠。

元服を迎えてより良い男に育つた想像上一刀が、武でも一人前になつて師を越える。

圧倒的な武の前に座り込み、見上げた先には想像上の成長した一刀の笑み。

そんなシチュエーションを前に黄忠は。

「……なんてものを想像させるのよ！ 惚れ込んでしまうじゃない！」

顔を朱色に染めた黄忠の感想に、桔梗がその通りと卓を叩く。
「じゃろう！ 何で三年前に来たあの儒子が、あそこまで良い男に育つんじゃ！」

正直予想外なほど、桔梗にとつて一刀の存在は大きくなつていた。最初は師弟愛かと思つていたが、月日の経過と共に気付いた。外観もそうだが、彼自身の中身にも女として惹かれている事に。しかも自分のとりえの武術も、いづれは追い抜かれるほどの素質を秘めている。

結果、武人としてよりも、師としてでもなく、女として彼に惚れ込んでしまつた。

武人として戦つてみたいという気持ちと同じほど、一刀を愛おしく想うほどに。

それが今回の事で恋心に気付いてしまつた。

黄忠もまた、桔梗が出した新しい関係がどういう関係の事か、理解に至つた。

「お陰で追い抜かれた後、奴を弟子ではなく男として見てしまいそうだ。」

今の師弟関係が心地良い桔梗は、関係が変化することを躊躇していた。

すると、決意の籠もつた目つきになつた黄忠が立ち上がる。

「桔梗！ 決めたわ。私、こっちに移るわ！」

「はっ!?」

「あの人には悪いけど、彼の傍にいて彼を落としてみせるわ！」

実は黄忠には、既に決まっている婚約者がいる。

その相手というのが大層な年上で、双方の実家のござり押しで決まった。

嫌なら身一つで家から出て行けど、半ば脅しをかけられて。

仕方がないと諦めていたが、相手が理解ある人で、嫌なら断つてくれていいと密かに言つてくれた。

彼も、まだ若い黄忠を自分のような老人の妻に迎えるのは、どうにも気が引けるらしい。

おまけに、どうやら彼にも密かに想い合つている女性がいるとのこと。

なので、決心を固めた黄忠に後ろめたい事は一つも無い。

「すぐにでも正式に断りを入れて、絶縁覚悟でこっちに移るわ！」

「そんな上手くいくか！」

「大丈夫よ。あの人と上手く口裏を合わせるから！」

婚約相手は城内でそれなりに発言力もある人だそうで、断られた事を理由に巴郡に飛ばすくらい訳も無いそうだ。

「そうと決まれば膳は急げね！　すぐに行つてくるわ！」

普段のお淑やかさの欠片も見せず、恋に生きる一人の女性として駆け出す黄忠。

長い付き合いの友人の新たな一面を見た桔梗は、閉められた扉をボカンと眺めていた。

同時に、躊躇一つせずに行動できる彼女を羨ましく思つた。

この数日後、実家に帰つた黄忠は、婚約者とその親戚に正式に婚約の断りを入れた。

両家は憤怒し、彼女を軟禁してでも婚姻を結ばせようと言ひ出した。

そこへ婚約者が口を挟む。

予め口裏を合わせた通りに、断つて恥をかかせた事を理由に、相応の報いを与えると。

その場で降格処分を言いつけ、顔も見たくないから余所へ飛ばすよう太守に進言すると伝えた。

それを受け入れた黄忠はともかく、憤怒していた両家が今度は慌てだす。

余所へ飛ばしたら、それこそ婚姻どころではないからだ。

思いとどまるように婚約者に告げるが聞き入れず、太守である劉璋の下へと行ってしまった。

がつくりと落ち込む両家を気にせず、黄忠は荷物整理のために部屋を出て行つた。

後日、何かと理由を作つての処分と異動が決定。

せめてもの情けという形で婚約者が手を回してくれたので、移動先是友人の桔梗がいる巴郡になつた。

巴郡の太守である彼女の下で、武官として働くようにと通達が届いた。

「……お互い、後悔しない道を行けそうですね」

「ええ。どうかお元氣で」

「黄忠殿も」

城で擦れ違いざま、周りに誰もいないのを確認して、密かに交わした言葉。

お互いのために騒動を起こしたが、後悔しない道を歩める事に自然と笑みがこぼれる。

数日後、両親に二度と黄家の敷居を跨ぐなど言われながらも、予定通りに巴郡へと移ることに成功した。

「よく來たな。本当に移るとは思わんかつたぞ……」

迎え入れた桔梗は、表情を引きつらせながら一応は歓迎する。

「色々あつて、ちょっと大変だつたけどね」

こつちに来るまでの間、正式に通達があるまで実家から相手に謝るよう何度も言われた。

それでもお互いの為、無視して聞き流しながら荷物整理と仕事の引き継ぎを行つた。

「で、元婚約者の爺さんはどうなつた?」

「引退するいい切つ掛けになつたつて、喜んでいたわ。今頃は件の女性と、各地の温泉を求めて旅をしている頃かしら」

ニコニコ笑いながら、想い人と旅に出た元婚約者に感謝する。

ちなみにその元婚約者も実家に帰るつもりは無く、想い人の女性と共に温泉地を巡りながら、残り少ない余生を送ると言つていたらしい。

「それで、桔梗の方は腹を括つたの？」

黄忠の問いかけに、桔梗は難しい表情を浮かべる。

「……む」

「まだなのね。じゃあ、今のうちに呂迅君を落とさせてもらうわ」

友人からの挑発に、桔梗の心は揺れる。

一刀と黄忠はホンの数回しか会つた事が無い。

だが、その数回で彼は黄忠の心を引き寄せた。

持つて生まれた天然女タラシぶりを發揮し、彼女の心を掴んでみせた。

前々回に来た時の去り際など、彼が婚約者だつたらなと言つていた。

そして前回、自分が後押しをした形になつてしまつたが、彼女は本気で一刀を狙うようになつて行動に移した。

「待て」

一方自分はどうか。

気持ちには気付いたものの、正直に従つているのは武人としての気持ちのみ。

愛しい想いは表に出せず、何もできないでいた。

今的心地よい関係が壊れるのが怖くて。

そんな自分自身が、どうしても桔梗は許せなかつた。

「未だ一刀は修行中の身に加え、元服前じや」

何かと相談したり会話をしたりする大切な友人。

だが元々は、友人である以前に好敵手だつた。

同じような遠距離を武器を得意とし、何度も的当て勝負をして競つた。

勝つたことも負けた事もあつたが、引き分けは圧倒的に多かつた。だからこそ、引くわけにはいかなかつた。

武人としてではなく、好敵手でも、友人としてでもない。恋をした一人の女として。

「だから、せめて一刀が元服するまで待て。二年後から勝負開始じゃ。その時はわしも負けん！ 今度は武人としてではなく、女として紫苑と勝負じやな」

それを聞いた黄忠は、やつと素直になつたかと微笑む。

本当の桔梗の姿を見られた事が嬉しい反面、強力な好敵手として蘇つたので複雑な気持ちだつた。

「それでこそ桔梗よ。その勝負、受けて立つわ。でもその前に、仕事はしつかりやりましょうね」

なので、軽く仕返しをするつもりで指摘する。

「うぐ……」

山積みになつてゐる仕事を前に、桔梗の筆は完全に止まつてゐる。というより、筆を放り出して仕事を放棄してゐる。

これをそのまま放棄してしまつたら、いつの間にか酒を没収した一刀の手により、知らぬ間に何かしらの形で酒を処分されてしまう。「さつ、私も手伝うから頑張りましよう」

空いている椅子に座り、手伝えるものを手伝おうとする黄忠。渋々と仕事を再開しようと、放つておいた筆を手に取る。

するとそこへ。

「失礼します、お館様」

いつになく、真剣な表情をした焰耶が入室してきた。

室内にいた黄忠に会釀をし、桔梗の傍へ歩み寄る。

何かあつたのかと、表情を引き締め、慌てないように心の準備をする桔梗。

ところが焰耶の口から飛び出したのは、予想外の言葉だつた。

「私がまだ至らぬ未熟者なのは充分承知の上で申し上げます！ どうか一刀と恋仲になることをお許しください！」

そう宣言して頭を下げる姿に、桔梗も黄忠もポカンと口を開けたまま固まる。

「兄弟子への憧れなのかと思つていましたが、違いました！ 私は一

刀の事を心より想っています！」

焰耶の大胆発言に二人は呆然とし、喋る内容を全て聞き流している。

「なので、どうかこの想いを一刀に告げることをお許し……あつ、あの……？ どうしました？」

反応が無いので喋るのを止め、固まっている二人に声をかける。まさかの参戦者に硬直した二人は、ゆっくりと顔を向き合わせ頷く。

とりあえず告白前だつたのは助かつたと、互いに心の中でほつとする。

そして焰耶に歩み寄つて桔梗が左側、黄忠が右側の頬を摘む。

二人の行動の意図が読めず、両頬を摘まれた焰耶はオロオロする。そんな焰耶の頬を二人は。

「二年早いわ！」

声を合わせ、同時に思いつきり引つ張つた。

次の瞬間、自室で報告書を纏めている一刀の耳に、どこからか焰耶の悲鳴が聞こえた。

「？ なんだ？」

何の悲鳴だろうと一刀が気にしている頃、焰耶は引つ張られた両頬に手を添えて二人に詰め寄つていた。

「何をするんですか！ 理不尽です！」

「うるさい！ ちょっと耳を貸せ！」

耳を引つ張られた焰耶に、先ほど黄忠と決めた内容を話す。
それを聞くと拳を握り締め。

「わ、私だつて負けません！ お館様とその御友人が相手でも、一刀は譲りません！」

怯む事無く参戦を表明する少女に、年上女性達は揃つて不敵な笑みを浮かべる。

やれるものならやつてみろと言わんばかりに。
「よかろう！ 二年後より、ここにいる三人で全身全霊をかけて勝負じや！」

「誰が呂迅君を射止めても恨みつこなしね」

「望む所です！」

かくして、一刀の知らぬ間に三人の女性達が動き出した。

全ては一刀の隣に立つために。

「じやが、負けても側室は可にしておくか？」

「賛成よ」

「大賛成です！」

念のため保険もかけながら。

「へつくし！ 風邪かなあ？ 恋も風邪ひいてなければいいけど」

そうとは知らない一刀の頭の中には、長年会えないでいる従妹しか

浮かんでいなかつた。

拠点フェイズ01

桔梗拠点 師弟追いかけっこ

二人の弟子をとつてから、わしの周囲は賑やかになつた。
一人目は親父殿の元部下の息子。

とてつもない才能を秘めており、どれほどの武人になるか見当がつかん。

今ではわし本来の武器、豪天砲を相手にしても僅かに劣る程度。もうしばらくすれば、いよいよ追いつき追い抜かれる日がくるやもしけん。

そいつの名は呂迅、真名は一刀。

二人目は一刀が拾つてきた少女。

こやつもなかなかの才を持つており、特に力そのものは大の大人も敵わなん。

もつとも、その力を使いこなす技量と心がまだ足りんのじやがな。

そいつの名は魏延、真名は焰耶。

若く才のあるものを潰すわけにはいかん。

かといつて、蝶よ花よと甘やかすわけにもいかん。

人を育てるとは、これほど大変なのかと実感した。

親父殿から、最も大変で手間と金が掛かるのは、人を育てる事だと教わつた。

その頃のわしはあまり理解しておらんかつたが、今はそれを実感しておる。

何も知らない素人に時間を掛けて教え、給金などで金を浪費して一人前に育てる。

太守についてからはがむしやらに仕事をしてきたが、ようやく落ち着いてそういう事を考えられるようになつた。

「……で？」

「そんな日々の、数少ない潤いは好物の酒なんじゃ」

今、わしの目の前には鬼畜弟子が腕を組んで睨んでおる。

息抜きに一杯やろうかと蓋を開けた瞬間に姿を現し、酒壺を没収し

おつた。

「だからつて、仕事の合間に飲むのはやめてください！」

「一杯だけ、一杯だけじゃ！」

「駄目です！」

懇願するわしを無視し、壺を手に走り去る鬼畜弟子こと一刀。
「待てえい！」

奴とわしの追いかけつけは、今に始まつた事ではない。

眞面目な文官長が一刀に頼んで以来、こうして酒を巡る追いかけつけは始まつた。

ここでも師匠としての面目を果たしたいところじやが、そもそもいかん。

向こうは膨大な基礎体力を持つのに対し、わしはこここのところ机仕事中心で基礎体力が向上しておらん。

「くつ。走りにくいわ」

加えて走りにくい服装。

いや、走れんことはないが、あまり本氣で走ると裾が捲くれすぎで中が見えてしまう。

わしとて花も恥らう年頃、そういうのは気にしてしまう。

だから毎回一刀には逃げ切られ、仕事をせねば酒を返してもらえずにはいる。

「だつたら、もうちよつと走りやすい服にすればどうですか？」

「うるさい！ これがわしの拘りなんじゃ！ というか、何で並走しておる焰耶!?」

いつの間にか並走しておつた、二人目の弟子。

一刀に集中しておつて気づかんかったわ。

「黄忠殿から、至急確認してほしいという書簡を預かっていまして。こちらになります」

そう言つて、走りながら書簡を差し出す焰耶じやが、正直空氣を読め！

「こんな状況でそんな事、やつている場合か！」

「でしたら、酒ではなくこつちを優先で。明日の朝議で使うらしいの

で

こやつも最近一刀の影響か、わしの酒に対する想いを平氣で踏みにじつてくれる。

「部屋に置いておけ！ 酒を取り返したら、すぐに見る！」

「そういう訳にも……。それに毎回、一刀に逃げ切られているじやないですか」

ぐはつ。

そういう事は言わんのがお約束じやろう、脳筋弟子が！

「それにもう、いませんし」

「なつ!?」

焰耶の相手をしているうちに、鬼畜弟子はとつくに姿を消しておつた。

おのれ、またしても。

「そういう訳で、こちらの確認をお願いします」

見失つたので立ち止まつたところへ、仕事を差し出す焰耶が恨めしく思つたわしは、大人気ないと分かりつつも八つ当たりすることにした。

「黙れ！ わしの酒をどうしてくれんじや、この脳筋弟子が！」

「あぶあばばばばっ!?」

憂さ晴らしに焰耶の両頬を摘んで引っ張る。

前に紫苑と引っ張つた時、割と伸びたので気に入つたおしおきじや。

結局、仕事を終わらせて酒を返してもらえたのは、夕飯時じやつた。

紫苑拠点 職場関係

元いた職場と実家を出て、友人の桔梗の下へ身を寄せた私の日々は充実していた。

以前に仕えていた劉璋様は、お世辞にも善政者とは言えなかつた。かといつて、私ごときじや口出しできなかつたのが、とても口惜しかつた。

今でも劉璋様の配下という事には変わりないけど、職場の雰囲気は

とても良いわね。

「黄忠様、本日もありがとうございました！」

『ありがとうございました！』

訓練をしていた兵士達が整列し、終了時の挨拶をする。

キビキビした動きで、見ていて気持ちがいいわ。

それに正直言つて、兵士の鍛度も行儀も向こうよりこつちの方が上ね。

数では劣るけど、質はずつといい。

何より、一人一人が向上心を持つて励んでいる。

向こうでは、途中から投げやりだつたり流して終わらせようつて兵もいたものね。

挨拶も適当だし、整列時の隊列もぐちやぐちやだつたわ。

「お疲れ様。部隊長は、本日の報告書を忘れずに提出するように」

『はっ！』

「では、解散！」

解散の合図で兵士達が散つていく。

それを見届けた私も、今日の調練の報告書作成のため自室へ向かつた。

「はあ、今日も忙しかつたわね」

報告書も提出して、今日やるべき仕事は全部終了。

忙しい日々ではあるけど、充実感のある忙しさは気持ちがいいわ。

向こうでは同じ忙しさでも、怠慢と面倒くささによる苛立つ忙しだつたもの。

「それに比べると、ここは本当にいいわね」

「何がですか？ 黄忠さん」

ふと掛けられた声に振り向くと、そこにいたのは私がここに移つた最大の理由となつた子。

「前の職場より、ずっといい環境つて事よ。呂迅君」

情熱的な赤い髪と瞳、その情熱に焦がされたような褐色肌。

そして天然の女誑しな言動。

無自覚だと分かっていても、その言動に落とされてしまった私。

彼に心奪われたために、婚約を破棄して実家と仲違いしても巴郡に来たかつた。

婚約相手とは元々お互い乗り気でなかつたし、実家への未練も無い。

あえて惜しい事を言うなら、降格のために給金が少し下がつたことくらいかしら。

最も、一人暮らしだから大した痛手ではないけどね。

「それは良かつたです。ところで、今日の仕事はもう終わりですか？」

「ええ、終わりだけど？」

何、この言い方は。

これは前の職場で私を飲みに誘おうとした、興味の無い男達と同じ言い回し。

ひよつとしてこれは。

「良ければ、一緒に夕食でもいかがですか？　いい店を見つけたんです」

この瞬間、私はすぐにでも両手を挙げて歓喜の声を上げたかつたわ。

理性を総動員して衝動を抑えなければ、一刀君に変な目で見られるほどに。

「いいわね。是非、べー一緒にさせていただくわ」

冷静を装つて返事をすると、一刀君は待ち合わせ時間を伝えて去つていった。

私はそれを見送ると足早に自室へ向かい、扉を閉めると。

「実家も職場も捨ててきて良かつたあああああああ！」

部屋の前の廊下を歩いていた兵や文官が驚くほど、声高に歓喜の声を上げた。

興奮した私は矢も盾もたまらず身だしなみを確認し、こういう日のために用意した秘密兵器を取り出す。

「まずは一人で食事して、ほろ酔い気分で一緒に部屋に戻る。足がもつれた振りをして押し倒すと、酔つた一刀君の口から想いを告げられ、真名を交換。最後にこれと私の色香の組み合わせで……」

取り出した勝負下着を纏い、頭の中で妄想という名の計画を立てていく。

二年後に勝負だとか言う桔梗の言葉なんて関係無いわ。

だって私が誘ったんじやない、一刀君から誘われたんだもの！

だから規定違反じゃない、私は悪くない！

一刀君を惚れさせてしまった私の魅力の勝ちよ！

この後、集合場所に桔梗や焰耶ちゃんもいて、皆で一緒にということ意味だったと知ることになるとは、この時の私は考えても見なかつた。

「どうかしましたか？」

「……別に」

何か悔しいから、真名だけは交換してもらつたわ。

焰耶拠点 好き嫌い

私は今、最大の危機を迎えている。

命的には別に問題無い。

少なくとも命を落とすことは無いし、怪我をしても大したことはないだろう。

だが、精神的にはとても傷つく。

そんな私の天敵が、目の前で尻尾を振つていた。

「……」

「……くうん」

「……」

「わう？」

ゆっくり後ずさりする私をじっと見つめ、鳴き声を挙げながら距離を詰めようとする一匹の犬。

「……」

私が一步下がれば、向こうも一步近づく。

二歩下がれば、二歩近づく。

「……とりや！」

「わおん！」

背を向けて走り出すと、向こうも私を追いかけだした。

私も鍛えているから走るのには自信があるが、さすがは犬。
素早い駆け足で私の後をしつかり付いてくる。

「頼む！　付いて来ないでくれ！」

「わう！」

私の言っている事を理解していないのか、無視しているのか。
どつちだらうがこの際構わないが、私は犬に追いかけられている。
何故、早朝の走り込み中に遭遇してしまったんだ。

周りに人影がまばらなのは幸いだが、何故出会ってしまったんだ。
私は何故か犬に好かれやすい体质らしいが、お陰で私は犬嫌いになってしまった。

だつて、気付けば大量の犬に埋もれていたんだぞ！

あつちこつち舐められて体中ベタベタになつて、友達が皆引いていたんだぞ！

舐められ続けたせいで敏感肌になってしまったんだぞ！

だから私は犬が大嫌いなんだ！

「ぬおおおおおつ！」

「わん！」

「あおん！」

「くうん」

「つて、何か増えるだと？」

気付けば、一匹だつた犬が大量に増えていた。

このままではいずれ追いつかれ、アレが待つている。

犬に埋もれ、身動きできなくなり、舐められてベタベタ地獄。

ただし敏感肌のせいで気分は悪くない。

最悪だ！

「ぬおおおおつ！　なんとかして城まで！」

私は必死に走った。

城に着けば、誰かが助けてくれると信じていた。

地面の壅みに足をひつかけ、転ぶまでは。

「わあああああつ！」

勢い余つて豪快に転んでしまった私に、犬の軍勢が迫る。

「やめろ、来るな、来るなああああ！」

通じないと分かつていながら、口に出てしまう拒絶の言葉。

しかし、犬達は楽しそうに接近してくる。

武器も振り回せる棒もないのに、追い払う事もできない。

あの地獄が始まるのかと、目を閉じて待ち構える。

ところが、いくら待つても舐められる気配も埋もれる感覺も無い。

おそるおそる目を開けると、そこには私と犬の間に立っている一刀がいた。

「か、一刀!?

一刀は犬に向けていた顔を私に向け、笑みを見せてくれる。

だが、犬の方を向くと戸惑った様子の犬達が、小刻みに震え始めた。まるで一刀が発している雰囲気を、本能的に恐れているかのように。

「……ハウス」

一刀が何か分からぬ言葉を言うと、雲の子を散らしたように犬達が去っていく。

何はどうあれ、私は一刀に助けられたということだ。

「ふう。大丈夫か、焰耶」

「た、助かつたあ」

「そんなんに嫌いなの？ 犬」

「うう。こればっかりはな。ともかく、肩を貸してくれ」

ほつとした私は脱力して腰が抜けてしまった。

一刀に肩を借り、城への道を歩き出す。

正直犬は嫌いだが、一刀とこうして寄り添つて歩けるのなら、少しは良かつたかなと思つた。

でも、私は気付かなかつた。

一刀の威嚇が無くなり、戻ってきた子犬がいたことに。

「くうん」

鳴き声に気付いた時には、もう足を舐められていた。

直後に私は工口イ声を上げてしまい、しばらくの間一刀と気まづくなつてしまつた。

やつぱり犬は大嫌いだ！

覚醒

恋に燃えて移籍した黄忠が仲間に加わり、待ち望んだ二年が経過。その二年の間にも色々な事があった。

互いに真名を交し合つたり、さらなる修行に明け暮れたり、酒をかけた仕事に没頭したり。

ともあれ、元服を迎えた一刀の争奪戦が遂に幕を開ける。だがその前に、待ち構えていた現実を目の当たりにしていた。

「はあ、はあ……。よもや、これほどになるとはな……」

疲れきつて膝を着く桔梗。

紫苑も息を切らせて座り込み、焰耶に至つては大の字に寝転がつている。

「いつかはこの日が来るとは思つていたけれど……」

「わ、私の目標が……一刀の背中が……大きすぎる……」

三人の中心には、何かやつちやつたかなといった雰囲気の一刀。さすがに疲れて息切れはしているが、負傷らしい負傷は少ない。つい先ほどまで、この三人を順番に相手にして手合わせをしていたというのに。

「はははっ。ここまでぶつちぎりに追い抜かれると、かえつて清々するのお！」

仕事の合間に鍛錬も欠かさず積んできた。

追い抜かれる日を少しでも伸ばし、師匠としての面子を守るために。

だが一刀はそんな事おかまいなしに追い抜き、圧倒的な差をつけてみせた。

逆にさっぱりした気分になつた桔梗は、複雑な心境ながらも弟子の成長に笑顔を送る。

「まさか三人を順番に相手して、このザマなんてね」

巴郡へ移つて以来、紫苑も何度か手合させはしてきた。

最初は一刀がどうにか食いついていたのが、いつの間にか追い抜か

れて、気付けば圧倒的な差をつけられた。

「こ、こなんなんじや……一刀の背中を、守れない……」

息も絶え絶えになりながら、目標の大きさを実感する。

憧れが恋心に変わった今でも、かつて本人に宣言した目標は変わつていはない。

しかし当の本人との差が広がる一方なので、軽く挫折しかかつていた。

「はあ、はあ。えつと、大丈夫?」

三者三様の様子に掛ける言葉が見つからず、無難な言葉を掛けておく。

「まあ、なんとかの」

「大丈夫よ」

「よ、余裕だ。はははっ」

桔梗と紫苑の二人は問題なく立ち上がるが、焰耶は鈍碎骨を杖代わりに立ち上がっている。

しかも足下は震えている。

「いや、焰耶は余裕ないでしょ。脚が生まれたての小鹿みたいだから」
満足に動けなさそうな姿に、一刀の天然タラシ能力が発動する。

スタスタと焰耶に近づき、疲れているにも関わらず、さも当たり前のように焰耶を抱き上げた。

急に抱えられた焰耶は驚いて鈍碎骨を手放し、桔梗と紫苑は目を見開いて驚く。

「という訳で、ちょっと部屋に送ってきます。あつ、鈍碎骨は後で俺が回収しておくんで」

焰耶を部屋へ運んでいく一刀の背中を見送る桔梗と紫苑。

抱きかかえられた焰耶は、落ちないようにと言い訳し一刀の服をしつかり掴む。

そして一刀に見えないよう、見送っている二人にドヤ顔を見せた。まるで抱えられていることを自慢するかのように。

すると、それが癪に障つたのか、鈍碎骨を拾い上げた桔梗が一刀の隣に駆け寄る。

「待て一刀。不甲斐ない弟子に一言言いたいから、わしが連れて行こう」

肩を軽く叩いて一刀に告げると、抱えていた焰耶の襟元を掴んで右腕で持ち上げる。

「あああの、桔梗様？」

子猫を運ぶように持ち上げられた焰耶は、自分に放たれる殺気に震える。

その姿は、怯える子猫のようだつた。

「という訳で一刀。部屋にはわしが送つておくから、仕事に戻つてくれ」

「はあ……」

生意気な態度を取つた子猫を連れて桔梗が去つていく。

焰耶が涙目を向けて助けを求めたが、一刀は黙つて合掌を送つた。すると今度は紫苑に肩を叩かれた。

「さつ、一刀君。早く仕事に戻りましょう」

傍から聞けば何でもない一言。

だが紫苑は心の中で続けた。

(二人っきりで……ね)

顔は普段通りの笑顔なのだが、その奥には企みが潜んでいた。

気付かずに一緒に仕事へ向かう一刀。

だが、未だに助けを求めていた焰耶が、紫苑の笑みに企みが潜んでいる事に気付いた。

「桔梗様！ 紫苑様が二人きりなのをいいことに、何か企んでいます！」

「なんじやとおつ！」

振り返つた桔梗の目に映つたのは、仕事部屋に戻ろうとする紫苑の横顔。

隣にいる一刀と喋つて いるその笑顔には、確かに何か企んでいるのが読み取れる。

長い付き合いだからこそ、企みそのものを見抜いた。

あれは二人きりなのをいいことに、誘惑を仕掛けようとしている顔

だと。

「こうしてはおれん！ ゆくぞ、焰耶！」

「はい、桔梗様！」

二人は休憩も説教も忘れ、企みを阻止するために走り出す。

この後、三人により大騒ぎになるのだが、自分が理由とも知らず一刀は首を傾げていた。

一刀を巡る女の戦いは、早くも始まっていた。

「……何やつてるんだろ、皆

当の一刃は彼女達の気持ちに気付く事無く、言い争いしているのを放置して仕事へ戻つて行つた。

「わしらが努力しても、肝心の奴が朴念仁じゃな」

「そうね」

「そうですね」

先ほどの言い争いの最中、途中で一刀がいなくなつていた事に気付き、渋々解散して仕事へ戻つた。

どうにか仕事を片付けた後、三人は集まつて一刀対策会議を行つてゐる。

「というより、策が無いのが問題だと思います」

「うつ」

拳手した焰耶の発言に桔梗も紫苑も言葉に詰まる。

動き出したものの、全員恋愛経験は皆無。

先代太守である父親の下、武官として過ごし、太守になつてからは仕事の日々を過ごす桔梗。

一応婚約者はいたが、実家で決められたので恋愛らしい恋愛は経験していない紫苑。

今回が完全に初恋の焰耶。

やる事なす事が全て手探りの、なんとも頼りない三人だった。

しかも相手が朴念仁とあつては、全くと言つていいほど先が見通せない。

「駄目じやな」

「駄目駄目ね」

「駄目ですね」

改めて恋愛経験皆無を思い知り、三人は揃つて落ち込んだ。

「これは何かしら手を打たなくては、共倒れの恐れがあるわ」

紫苑の発言に桔梗も焰耶も頷く。

横から誰かに一刀を搔つ攫われないようにするためにも、早急に手を打つ必要があつた。

「でも、どうすれば」

「致し方ない。知り合いの奥方達から助言を貰うか」

こうなると頼りになるのは、常に先駆者というものの。

恋愛経験のある人々に教えを請うしか、初心者には手がない。

「でも、もしも一刀君に気付かれたら？」

問題点があるとすれば、相談している事を一刀に気づかれる事。相談相手には口止めをすればいいが、相談している所を見つかれば言い逃れるのは難しい。

言い逃れせずに堂々と言うのも手なのだが、そうはいかない。というのも。

「言えるか！」

「言えないわね……」

「恥ずかしくてとても言えません……」

あなたに恋愛感情を抱いたけど、どうすればいいのか分からず助言を受けています。

などと言うことは、恋愛初心者の三人にとつては恥ずかしかつた。「となると……」

一番の手は一刀を一時的に自分達の傍から離すこと。

しかし、今のところ仕事で遠出する予定は無い。

賊の討伐も一先ず落ち着いてるので、出陣の予定も無い。

そこで桔梗は、ある手段を使うことにした。

「……休暇ですか？」

「うむ。この五年、お前は修行も仕事も頑張っている。よつて休暇を与えるから、里帰りでもして親に顔でも見せてこい」

権限を利用して一刀に休暇を与え、里帰りさせ城から外へ出す。

その隙に助言を貰い、実行する心の準備をしようという訳だ。

そうとは知らない一刀は、上司の気遣いに感動を覚える。

「あ、ありがとうございます！」

お札を告げて退室する嬉しそうな姿に、これで少し株が上がったかと満足する。

だが、彼女は知らない。

一刀が喜んでいる最たる理由を。

「五年ぶりだな、恋に会うのも。文でしか交流無かつたし、最後に連絡来たの半年前だし。帰つたらたくさん甘えさせてやるぞ」

上機嫌に荷物を纏める一刀の頭の中には、桔梗への感謝ではなく恋の事しかなかつた。

「では、気をつけての」

「はい。行つてきます！」

後日、一刀は桔梗達や部下に見送られて巴郡を旅立つた。

故郷を旅立つた後に比べれば、帰郷の行程はずつと楽だつた。

盗賊に出くわしても鍛えた武力で倒し、熊に遭遇しても武力で倒してみせた。

道中で商人の護衛をして小銭を稼いで路銀の足しにしたので、金銭面も問題は無し。

「……なんか、順調すぎて逆に怖いな」

道中で野宿しながら、ここまで行程を振り返る。

あまりに行き来のギャップがあるので、若干の不安を覚えた。

それほどまでに、今的一刀は逞しく強くなつていた。

そんな一刀に絶望を与える出来事が待つてゐるとは、この時は欠片も思つていなかつた。

「もうすぐ着くぞ。この丘さえ越えれば」

長かつた帰路も間もなく終着。

登つてゐる小高い丘を越えれば、邑が一望できる。

「俺の邑……が……？」

丘の頂上に着いた一刀の目に飛び込んできた光景。

懐かしい生まれ故郷の邑は焼け焦げ、無事な家は一軒も無かつた。

邑の中では、無事だつた人々が広場に集まり、身を寄せ合つてゐる。

「そんな！」

目にした光景が信じられない一刀は、すぐさま駆け出した。

丘を駆け下り全速力で邑に入り、広場へと駆けつけた。

「皆！」

突然響き渡つた声に一部の人が驚くが、声の主が一刀だと分かると安堵する。

「おお、呂迅君じやないか！ 帰つてきたのか」

近所に住んでいた男が駆け寄ると、周囲にいる人々も一刀の下へ集まつてくる。

だが、一刀はそれどころではなかつた。

邑がこんな有様になつてゐる上、両親と叔父夫婦、恋の姿が見えないからだ。

「村長！ 父さんと母さん、恋はどうしたんだ！」

近くにいた村長に詰め寄り、身内の無事を聞く。

すると全員が俯き、暗い表情になる。

「ご両親については、すまない……」

「すまないって……」

村長の話によると、数日前に盗賊が襲つてきた。

その盗賊達は邑から金品と食料を奪うと、次々と殺戮を始めた。

若い女も連れて行こうとせず、人殺しを楽しんでいるような連中ばかりだつた。

それを食い止め、少しでも避難の時間を稼ごうと一刀の父親が立ち上がつた。

必死に戦つて十数人の盗賊を切り伏せたが、脚の痛みで思うように戦えなかつた。

それでも命がけで時間稼ぎをし、最後は盗賊の頭に首を刎ねられた。

さらに避難しようとしていた母親は、飛んできた矢から付近にいた子供を庇つた。

子供を逃がし、動けなくなつた所へ複数の矢が飛来して次々に刺さ

り、命を落とした。

説明を聞きながら案内された遺体安置所のような場所で、冷たくなった両親と再会する。

「そんな……五年ぶりに会えると思つていたのに」

もう少し早く帰つていれば、互いに元気な姿で会えたのにと呟きながら、一刀は膝を着く。

目の前が真っ暗になる感覚に襲われる一刀の耳に、懐かしい声が聞こえた。

「にい……」

声を聞いた途端に目の前が明るくなり、後ろを振り返る。

そこには逃げるときに擦り剥いたらしき傷をいくつもつけた恋が、知り合いの女性に付き添われて立つっていた。

「恋……無事だつたのか」

目が合つた瞬間に恋の目からは涙が溢れ、一刀の下へ駆け寄つて来る。

「にいつ！」

飛び込んできた恋をしっかりと抱えてやると、そのまま恋は大声で泣き出した。

二人の再会に周囲からもすすり泣く声が聞こえ、目元を拭う者が數名いた。

「恋、叔父さんと叔母さんは？」

「ううう。あつち……」

指差した方向には、無残な姿に変わり果てた叔父と叔母が横たわつていた。

あつという間に恋以外の身内を失つた一刀は、叔父と叔母の亡骸を見ながら呆然とする。

そこへ、近所に住んでいた男が木箱を持って來た。

「呂迅君。これだけは幸運にも無事だつたんだ。お父さんから、君への元服祝いに送ろうとしていた品だ」

恋を連れて来てもらつた女性に預け、受け取つた箱を開けると、中には反りのある二本の紅い剣があつた。

滑り止めなのか柄には布が巻いてある。

それを手に取りじっくり眺めると、まるで炎を見つめているかのように体が熱くなつてくる。

「これは……」

さらに箱の底には、木札に書かれた手紙があつた。

一刀へ

たまにお前から届く木札で、一生懸命頑張つてているのは知つている。

そんなお前への元服祝いの品を送る。

使う武器が逆手二刀だと書いてあつたのでな、二本の剣を打つてやつたぞ。

叩つ切るというより、切り裂く刃にしてある。

渾身の二振りと呼べるこの武器、銘は紅蓮と烈火。この銘に恥じない腕の武官を目指せよ、一刀。

父親からの最後のメッセージを読んだ一刀は、木札を持つてゐる手に力が入る。

思わず木札が割れてしまうが、構わなかつた。

木札を箱の中へ戻し、両親の傍に置くと紅蓮と烈火を手に取る。見ているだけで燃え盛る心の中の炎。

その炎が、一刀の心を覆つていた何かを燃やしていく。

やがてそれは焼き尽くされ、鋭い目つきになつた一刀は立ち上がる。

「……村長、賊のいる場所は分かりますか？」

「分かることは分かるが……呂迅、お主！」

「教えて……ください」

振り返つた一刀の目を見た村長は、瞬時に悟つた。

何を言おうと止められない、と。

だからと言つて、言うつもりは無かつたのだが、発せられる迫力に思わず口を開いてしまう。

「北の山の麓辺りにある、今は使われていない古い砦だ」

「村長!？」

賊の居場所を教えた村長に、驚きの声が上がる。

場所を聞いた一刀は軽く会釈をし、目元を擦つている恋の下に歩み寄る。

「恋、兄ちゃんちょっと敵討ちに行つてくるな」

目を擦るのを止めさせ、頭を撫でてやりながら笑顔で告げる。まだ幼い恋はよく意味が分からなかつたが、なんとなく首を縦に振つた。

「帰つてくるよね？」

「勿論だ」

親指を立てて肯定し、紅蓮と烈火を手に駆け出した。

「村長、何故!？」

止めようとした男の一人が村長に詰め寄る。

村長は首を横に振つた。

「……止めても無駄じや。奴の、呂迅の中には」

既に見えなくなりかけている一刀の背中を見つめ、村長は言つた。

「修羅が住んでおる」

両親の残してくれた二本の剣と共に駆けて行く。

邑の北側にある山の麓へと。

そこにある古い砦の城壁が見えると、近くの茂みに隠れて様子を窺う。

入り口らしき古びた門の前には、退屈そうにしている見張りが二人。

中での宴会に混ざれなかつた不満を、声を大にして言い合つている。

「中は宴会か……」

ならば酒に酔つているし、油断もしているだろうと判断し、紅蓮と烈火を抜く。

(ごめんな、父さん)

せつかく遣してくれた剣の初陣が、復讐という形になつた事を心の

中で父親に詫びる。

だが、砦の中にいる賊と同じように、殺戮行為に魅入られるつもりは無い。

生まれ変わる前の世界では、どんな理由を付けようとも殺人は殺人。

しかし、この世界ではそれが当てはまらない。

分かっているつもりだったが、どこか割り切れなかつた。

それが復讐という目的によつて、遂に破れなかつた殻が破れた。

「……いくぜ」

逆手に持つた剣を握り締め、茂みから姿を現して駆け出す。

それに気付いた賊の二人が無駄話を止める。

「おい、なんだあいつ？」

「ガキじやねえか、しかもなんか良さそうな剣を持つてやがる。ちよ

うどいい、あれを奪つて——」

剣を手に二ヤける盗賊の一人が、それ以上喋る事はなかつた。

喋つている最中に順手に持ち替えた右手の紅蓮を投げつけられ、喉に突き刺さつたからだ。

投擲により勢いのついた紅蓮の刃は喉を貫通し、賊は声も上げる事が出来ずに倒れる。

「なっ——」

もう一人の方も、驚いている隙に烈火で喉元を斬られ、首が宙を舞つて地面に落ちた。

「——！　——！」

喉に剣が刺さつた賊はまだ生きているが、声も出せずにもがいてい

る。

それを恨みの籠もつた目つきで見ている一刀は、紅蓮の柄を掴んでそのまま賊の喉を切り裂いた。

「——！」

喉からの激しい返り血を浴びながら、息絶えた賊二人の横を通つて砦へ入る。

奥の方から宴会の騒ぎ声が聞こえてくるので、そちらの方へと歩を

進める。

そこへ、追加の酒を運んでいた数人の賊が一刀を見つける。

「だ、誰だてめえ!？」

「お頭！ 変な奴がいまっさあ！」

賊が声を上げると、予想通り奥から酔った賊がゾロゾロと出てくる。

「なんだ、ガキじやねえか。おい、見張りはどうした？」

子供とはいえ侵入者が目の前にいるので、見張りが寝ているのではないかと思った。

「……気付かないのか？」

「あつ？」

「俺の格好を見て、気付かないのか？」

冷たい口調でそう言つて、数歩傍へ歩み寄る。

酔つていた賊の頭は目を擦つて一刀を見る。

ボンヤリしていた視界が鮮明になつてくると、返り血を浴びた一刀がそこに立つてゐるのが、ようやく理解できた。

「なつ——」

「次はお前達だ」

剣を構え賊を睨みつける。

酔いが醒めるほどの殺氣と眼光に、賊達は震えて動けない。

一番大柄な賊の頭でさえ、同じような反応を見せてゐる。

「や、やれえ！ あのガキをやれえ！」

『お、おおおおつ！』

頭がようやく搾り出した指示で、賊は怯えながらも動き出した。

だが、酔つてゐる上に怯えているのでは、今の一刀の相手にはならなかつた。

真つ先に斬りかかつた賊の右腕を紅蓮で切り落とし、正面の賊の腹部を烈火で切り裂く。

倒れていく賊を踏み台に跳躍し、別の賊の顔面を蹴りつけながら、周囲の賊を横回転して斬り捨てる。

「……弱い」

さらに襲い来る賊にそう咳き、一蹴していく。

一刀の周囲には大量の鮮血が飛び散り、その中を駆け抜ける。

鮮血の中、賊を薙ぎ払いながら進む姿は、まるで赤い竜巻のよう。

返り血で徐々に紅く染まる一刀の姿に、後方にいる頭は恐怖に駆られる。

「バカな、あんな、あんなガキに!?」

見る見るうちに賊は倒れていき、恐怖で逃げ出す輩も出始める。しかし一刀はそいつらも逃がすつもりはなく、跳躍して接近、背後から斬り捨てていく。

「一人も……逃がさねえ！」

自身の背後からの攻撃を烈火で受け止め、紅蓮で両手を斬つて落とし、蹴飛ばして頭を睨む。

「ぐつ。ど、どうした、早く奴を！ 奴……を……？」

頭が気付いた時には、もう部下は誰もいなかつた。

全員が一刀に斬り捨てられ、唯一生き残っているのは、両腕を斬り落とされて喚いている賊だけ。

「後は、お前だけだ」

喚いている賊の下顎を蹴飛ばし、意識を奪う。

後は放つておけば失血死するだろう。

なので、生き残っているのは頭の男一人だけ。

返り血で真っ赤に染まった一刀がゆっくりと近づくだけで、頭は恐怖に包まれしりもちを着く。

「あ、あわわ、わわ……」

逃げる様子も抗う様子も無く、ただ怯えるだけの姿。

こんな奴が頭の賊に、両親が奪われたのかと思うと、余計に怒りがこみ上げてくる。

「た、助け……」

「はあっ！」

情けなく命乞いをした瞬間、刃は振り抜かれて首が飛ぶ。

復讐を成し遂げた一刀は、大きく息を吐いて空を見上げる。

日が落ちかけて暗くなりつつある空を、ただじっと眺めていた。

「これが、三国志の世界つてか……」

自分の内面の変化により、今までで一番それを実感する。

邑で大人しく暮らしていても、目の前で屍となつた賊によつて戦乱に身を投じていたであろう。

「外史は常に俺を欲し、戦乱に身を投じる……か」

生まれ変わりの時に貂蟬に言われた言葉。

別の世界の北郷一刀の全員が経験しているとあつた、戦乱の世界。自分はその中で戦い抜く決意をした。

いや、今までは決意をしたつもり、という段階だった。

それが今回の件で本物の決意へと変わつた。

「……盗んだ物を返してもらうぞ、俺達の物だ」

賊の遺体を放置して、一刀は賊の住処へと足を踏み入れる。

いくつかの部屋を搜索して盗まれた金品を見つけたが、一度に全部持ち帰るのは無理そうだった。

後で邑の住人を何人か連れて、回収すればいいかと判断してその場を後にする。

「帰ろう、恋が待つてる」

瓶に溜めてあつた水で喉を潤し、武器にこびりついた血を洗い流し、一刀は邑へと帰還する。

賊を討つたことを皆に伝え、約束通りに恋の下へ帰るために。

共に修行

邑を襲つた盜賊を壊滅させた一刀は、返り血を浴びたまま邑へ帰還。

その姿に生き残つた人々が恐怖を覚え、道を開ける。

脇目も振らず両親の下へ到着すると、自分のしてきた事を伝える。

「父さん、母さん。ここを襲つた盜賊は俺が全員葬つたから」

それを聞いていた邑の人々は驚く。

僅か十五の少年がたつた一人で、ここを襲つた盜賊を壊滅させたのだから。

「にい！」

一刀が帰つてきたのを知つた恋が駆け寄つてくるが、血塗れの姿を見て怪我をしたと思ったのか大泣きする。

「大丈夫だよ、恋。俺は怪我はしていないから」

「うえつ、ぐすつ。ほんと？」

「本当だよ。ほら、見てみなよ」

服を捲くり、怪我一つ無い体を見ると恋は安心して再度泣く。

結局泣かれるのかと思った一刀は、優しく恋を抱いて頭を撫でてやる。

「ところで、呂布ちゃんはこれからどうするのかね？」

歩み寄つてきた村長の問い掛けに、一刀は考え込む。

自分以外の身寄りを亡くした以上は恋に行き場は無い。

唯一の行き場は、一刀が修行をしている桔梗の下。

村の誰かに預けるという手もあるが、今の恋を置いていけるはずがない。

家族を失い、残つた家族が一刀一人しかいないのだから。

「……恋、俺と一緒に来るか？」

勝手に連れて来るなど桔梗に怒られるのを覚悟で、一刀は恋を連れて行こうとする。

その問いに、恋は涙でぐちやぐちやになつた顔で答える。

「い、いぐつ！」

恋にとつて他に選択肢は無かつた。

ここに一人ぼっちで残るくらいなら、例え誰かに預けられても一刀を追いかけて行つただろう。

この様子を見て反対する者など誰一人として出ない。

「分かつた、師匠の方は俺がなんとかするから、一緒に行こうな」

「うん……」

結局その日は邑で一泊し、翌朝には一刀と恋は邑を去ることにした。

「他の皆はどうするんですか？」

「ここに残つて、邑を復興することにしたよ。しばらくは付近の邑に援助してもらう事になるがの」

見送りにきた村長が、苦笑しながら答える。

被害が被害だけに、簡単に復興とはいかないのは目に見えている。おまけに周囲の邑に借りも作つてしまふので、しばらくは辛い生活が続くのが心苦しいのだろう。

「頑張つてくださいね。俺も恋を連れて、たまには戻つてきますから」「うむ。その時を待つておるぞ」

村長と握手を交わし、村人達に手を振つて見送られながら一刀と恋は旅立つ。

その背中を見送りながら、村長は小声で呟く。

「呂迅の奴、ひょつとするととんでもない武人に育つかもしれんな」

あの年で盗賊団を壊滅させた才に、本人が努力することを知つてい
る。

この先何年後になるかは分からぬが、きっと呂迅の名が大陸に響き渡るだろう。

そんな想像をしながら、村長は笑みを浮かべた。

「楽しみじやの、彼らの未来が」

それまでなんとしても生き抜いて、やろうと決意し、復興の為に動きだした。

それから数日をかけ、一刀は恋を連れて桔梗達の下へと戻つた。

故郷での出来事と両親と叔父夫妻の死、連れて来た恋の報告と共に。

報告を聞いた桔梗は額に手を当てて俯き、申し訳無さそうな表情をしていた。

「すまぬ、わしがもう少し早く帰郷させていれば」

「今となつては結果論ですから、気にしないでください。それに、恋だけは生き残つてくれましたから」

知らない人が多きいるためか、恋は一刀の後ろに隠れて顔を少しだけ覗かせている。

通常なら可愛らしい人見知りの仕草に見えるが、今は寂しくて従兄に縋つてているように見えた。

「それで一刀君、呂布ちゃんをここに住ませたいのね」

「ええ、邑は大変な事になつていますし、他に頼れる人もないので」

「それは分かるがな……」

急に連れて来られても、どう扱うかに困ってしまう。

かといって、拾つてきた猫じやあるまいし、返してこいなど言えるはずもない。

どうしようかと悩んでいる中、桔梗と紫苑は恋をじつと見て感じ取つた。

一刀に勝るとも劣らない才覚を秘めている可能性を。

「なあ、呂布よ。お前がここにいたいなら、従兄と共に修行をしてみぬか？」

桔梗からの提案に恋だけでなく一刀もきよとんとした表情になつた。

「わしの目が確かなら、お前にも従兄に負けない武の才がある。それを磨くというのなら、ここに居てもよいぞ」

それを聞いた恋は一刀の陰から出てきてじつと桔梗を見る。

まるで、その話は本当なのかと尋ねるように。

「師匠、待つてください」

「口を挟むでない、一刀。これは呂布が決めることじや。お前が従妹を大切にしたいのは分かるが、今後もお前が守れるとは限らんだろう

？」

的を射た言葉に一刀は言い返す事ができなかつた。

恋を戦場に立たせたくないという想いで今日まで修行してきただが、肝心な時に自分は家族の下にいなかつた。

今回はたまたま恋は助かつたが、桔梗が言うように次回以降は一刀が守れるとは限らない。

今の世の中のことを考えれば、武を身に着けたほうが安全なのは確かだ。

しかし、恋のために強くなろうと考えていた一刀は、どうしても決意しきれなかつた。

どうすべきか悩んでいると、恋が一刀の服の裾を引っ張る。

「にい、恋も強くなりたい」

言葉は少ないが、それ以上に瞳は語っていた。

あんな悲劇は二度と遭いたくないと。

恋を戦わせたくない一刀としては断固反対したい。

でも、時代の現実がそれを許してくれなかつた。

ならば、生き残れるように歴史通り強くなつてもらおうと、一刀は腹を括つた。

「……分かつた。その代わり、やる以上は辞めるなんて言うなよ、恋」
許しを得たことで恋は大きく頷き、桔梗と紫苑にも頭を下げる。

「お願ひします」

「あいわかつた。では、明日から修行を始める。一刀よ、今日は呂布の身の回りの品を買い揃えに行け。焰耶、同性がいた方がいいからお主も一緒に行け」

「わかりました」

入り口付近に控えていた焰耶が返事をする。

そのまま三人は買い物に出かけ、部屋に残つた桔梗と紫苑は恋について話し合う。

「わしの目から見て、かなりの使い手になると思うのじやが」

「同感ね。一刀君と比べると互角かちょっと劣るかだけど、焰耶ちゃんと比べると才では圧倒的に上ね」

従兄妹揃つて大したものだと、二人は感嘆する。

同時に、その二人を育てられるのかと思うと胸が高鳴る。やる以上は生半可な武人にはしたくないので、早速育成計画を立てることにした。

一方で一刀達は、恋の生活用品を買い揃えるために街中を歩いていた。

ずっと田舎の邑暮らしだった恋は、初めて街を見るので目を輝かせている。

その視線の大半が飲食店ではあるが。

「にい、あれ何？」

興奮した様子で目に入つたものを指差している。

その度に一刀と焰耶が教えてあげ、食べ物の場合はおねだりされる。

できれば買つてあげたいが、予算が限られている上に目的は生活用品なので説得して諦めさせる。

残念そうな恋の表情を見るたびに、一刀の心は痛むが仕方がない。

なぜなら、今回の予算は保護者役である一刀の財布から出ているのだから。

「というわけで、まずは着替えだな。下着とかも買うから、ここは焰耶に任せる」

「分かった」

既に恋も十歳になつてるので、さすがに一刀が買うのには抵抗があるらしく、焰耶に丸投げする。

恋は何で、という表情をしているが、焰耶に連れられて店へ入つていった。

しばらく待つた後に恋は買った服をそのまま着て出てきた。

「にい、見て

真っ先に見せたかつたのか、満面の笑みで一刀に見せているが、その服が一刀には驚きだつた。

腹部が丸見えになつていて、デザインが全て自分が普段着ているものと同じだからだ。

「おそろい！」

鼻息を粗くしてドヤ顔をする恋から視線を外し、後ろで苦笑いをする焰耶へ視線を向ける。

「いやあ、どうしてもこれがいいって譲らなくて」

仕方なしにこれを購入したのかと一刀は察した。

正直言うと、腹部丸出しなのは気になるが似合っている上、自分と

おそろいなので文句を言い辛い。

なにより恋が喜んでいるという点が、一番重要だった。

「恋が気に入っているならいいか。じゃあ、次行こう」

いいのかと驚いている焰耶を置いて、一刀と恋は歩き出す。

後から追いついた焰耶と共に、三人は必要な品を買い揃えていく。道中でいい匂いを嗅ぎつけた恋により脱線しがたが、どうにか軌道修正して買い物を終えた。

ようやく買い物を終えた頃には、日暮れになつていた。

「はあ、疲れた」

「買い食いしないで正解だな。残金がほとんど無い。ああ、これで今月の自由に使える金が……」

予定外の大出費に一刀は肩を落とす。

しかしこれも恋のためだと、翌日からの仕事に励もうと気持ちを切り替える。

いざとなつたらコツコツ貯めていたへそくりを使おうと考えながら城へ戻ると。

「おかえりなさい」

「呂布の歓迎の宴の準備はできているぞ」

桔梗と紫苑により、ささやかながら宴の準備がされていた。

卓の上に並ぶ料理に恋の目が輝き、素早く席に座る。

その素早さに桔梗と紫苑だけでなく、焰耶も驚く。

唯一人、慣れている一刀だけが荷物を置いた後、恋に注意する。

「恋、食べるのは皆で乾杯してからだぞ」

空腹のため料理に手を出そうしていた恋は不満そうな顔をするが、

それが礼儀というものだ。

全員が席に着いた後に杯を持ち、掲げる。

「では、新たに呂布が仲間になつたことを祝して。乾杯」

『乾杯』

乾杯が終わると恋は待つてましたとばかりに食べ始める。
意地汚く喰い散らかすのではなく、まるでハムスターが頬袋に食べ物を詰め込むように。

しかも頬の中に食べ物が溜まらず、あつという間に喉の奥へ消えていく。

なので、口に含んだ瞬間に消えるように見える。

おまけに食べている姿がなんとも和やかというか、ほのぼのとしているというか。

慣れている一刀を除く三人は、恋の食べている姿に表情が緩む。

「呂布よ、これを食べるか？」

「こつちも食べていいわよ」

「ほら、これもやるぞ」

次々と料理を提供され、恋の表情は満面の笑みに包まれる。

それに伴つて三人の表情を余計に緩み、結果的に用意した食事のほとんどどが恋の胃袋に消えた。

「げふ。ごちそうさま」

食べ終わった頃になつて、ようやく三人は食べさせてばかりで自分達が食べていない事に気付いた。

「はつ、いつの間に」

「何、この子の食べる姿は」

「まさかわしが酒を飲むのも忘れてしまうとは……」

この魔力から逃れるのは容易ではないと、食後のお茶を飲みながら一刀は思った。

かつては一刀もこの魔力に負けて、おかげを次から次へと提供したものだ。

恋も恋で大食いなので、もらつてもまるで苦にせず、黙々と食べ続けていた。

その割には体型もふくよかではないので、大した消化力と燃費であ

る。

「それにしても、この体でよく食べるもんだな」

自分より小柄なのに、自分より多い量を食べたので焰耶は若干驚いている。

「一刀君、頑張つて働くないと恋ちゃんの食費を稼ぐのは大変よ」「分かつていますよ」

まだ正式に働く事になつていない恋には、給料は支払われない。ある程度成長して仕事を任せられるようになるまでは、一刀が恋の生活費を捻出することになつている。

「俺は俺で頑張るから、恋も頑張つて強くなるんだぞ」「ん！」

少なくとも自分の身は守れるようにと心の中で呟く一刀だつたが、それが良い意味で裏切られるとは、この時の一刀はまだ知らなかつた。

翌日、一刀と焰耶は警邏の仕事へ向かい、桔梗は執務室で書類とにらめっこ。

手の空いている紫苑が、恋の修行をつけることになつた。

とはいっても、やつているのは基礎体力作りと武器の扱い方だけ。まだ体の出来上がつていらない恋には、通常の訓練は難しいと判断しての修行内容だ。

「という訳で、恋は今頃訓練場で走り込み中だ」

「まあ、まだ仕方ないよな。どんなに才能があつても、体ができてなきや意味ないもんな」

会話の中で焰耶は、かつての自分を思い出していた。

今でこそ重量のある鈍碎骨を振り回しているが、以前は武器に振り回されていた。

体作りを甘く見ていた焰耶は、このことでようやく体作りの大切さを学んだ。

「そうだよな。昔、焰耶が鈍碎骨振つたら、勢いに負けて体がグラグラ揺れてたもんな」

「言うなよ恥ずかしい」

その頃は一刻も早く一刀の背中を守りたくて、ちょっと背伸びをしていた。

なので過剰な自信で自滅したり、その事で桔梗から叱咤されたりが割と多かった。

「今でも調子に乗ると自滅したりするけどね」

「ほつとけ！」

そんな他愛ない会話をしながらの警邏を終えて戻ると。「にい……疲れた」

徹底的に基礎訓練をやっていたのと、初めての修行で恋はクタクタになっていた。

後のこととも考えずにハイペースでやっていたのが、疲れた原因。

「呂布ちゃん、今度はもう少し考えてやりましょうね」

「……はい」

紫苑から教育的指導を受けた恋は、休憩のため木陰へ歩いて行つた。

「それで、どんな感じですか？」

「正直予想以上だわ。足は速いし力は強いし、育てがいがあるわ」

ペース配分こそできていないが、素質そのものはとても高い。

他にも内面的な部分や経験値といった課題はあるが、それらを克服して慢心せず鍛錬を繰り返せば、天下に名を轟かせる将も夢ではない。それが紫苑から見た恋の評価だった。

「さつ、次は一刀君と焰耶ちゃんの番よ」

「はい」

「了解です」

訓練場で訓練をしていた兵士達が端に寄り、空いた中心に一刀が紫苑と焰耶に向き合つて立つ。

訓練用の武器を構え、合図を待つ。

「はじめっ！」

兵士の一人が合図を出すと同時に焰耶が前衛として飛び出し、後衛の紫苑が矢を射る。

一刀は冷静に左手の剣で矢を叩き落しながら、右手の剣で焰耶の攻

撃を捌く。

威力そのものでは武器の重みの分、焰耶の方が上だが、一刀はそれを受け流して上手く威力を殺している。

さらに前方だけでなく全体に注意を向けているので、死角から飛んでくる矢にも対応ができている。

「にい……凄い」

初めて一刀の戦う姿を見た恋は、先ほどまで脇目で見ていた兵士の訓練との違いに目を奪われた。

重そうな武器を片手で捌き、飛来する矢を避けるか剣で防ぐ。

焰耶と紫苑の技量が決して低いわけではないので、余計に一刀の強さが目立つ。

「焰耶ちゃん、式式よ！」

「はい！」

これまで焰耶をブラインドにしながら援護をしていた紫苑の指示で、次の攻撃パターンへ切り替える。

前衛と後衛はそのまま、次は紫苑が後方で動き回りながら矢を射る。

「うおつと、移動砲台か」

見えないように影から射るのではなく、移動しながら射る事で多彩な軌道で相手を幻惑する。

さらにそつちに気をとられていれば焰耶への対応が甘くなる。

これが焰耶と紫苑で考えた式式というコンビネーション攻撃だ。

「どうだ、これならお前もいはずれは

「だつたら、うだ！」

調子に乗ってきた焰耶だが、ここで一刀は懐へ飛び込んできた。

ほぼ密着しているんじゃないかというほど接近し、剣ではなく柄を握っている拳で攻撃する。

「くつ。紫苑さん」

大型で重量級の武器の為、ここまで接近されてしまう対応ができない焰耶が援護を求める。

しかし、紫苑も紫苑で矢を射れなかつた。

というのも、二人の距離が近すぎて焰耶に当たる可能性が高いからだ。

今回のコンビネーションは、相手が鈍碎骨の重く強い一撃を嫌い、ある程度距離を開けているから通用するもの。

今的一刀のように超接近戦をされたら、攻撃範囲が一刀の真横から後方に限られてしまう。

おまけにそこまで回り込んだら、前衛で壁役となつている焰耶が紫苑を守りきれない。

「駄目。焰耶ちゃん、なんとか引き離して」

「そう言われても。あうつ！」

どうにかしようとはしたが、至近距離まで接近されでは一刀の方が上だった。

昨年辺りから、万が一武器を失つた場合に備え、拳闘での訓練もやつていた成果が出た。

あつという間に焰耶を沈めると、矢を避けながら紫苑に接近し、一撃を入れて一刀の勝利となつた。

「勝者、呂迅！」

審判役の兵士の判定に周囲から歓声と僅かながら拍手が上がる。

模擬戦を一部始終見届けた恋の瞳はキラキラ輝き、勝者である従兄を見つめる。

「くそ、また駄目だつたか。紫苑さんと考え抜いた戦法なのに」

「もうちよつと工夫すべきだつたわね。いえ、それ以前にこうなることを予想すべきだつたわ」

敗者の二人は模擬戦の内容と式式の欠点について反省する。

予め気付いていれば、もっと有効な策を立てられたはずなのだから。

「どうじや、お前の従兄は」

未だに見蕩れている恋の下に桔梗が現れる。

「にい、とても強い……」

「そうじやろう？　じやが、お前にも同等の素質がある。いずれは、一刀と肩を並べて戦えるじやろ」

桔梗からの言葉に恋は想像した。

戦場で一刀と背中合わせで無双する自分の姿を。

途端に体の疲れが吹っ飛び、元気よく立ち上がる。

「頑張る！」

「うむ。では早速、これを持って素振り一百じゃ」

「分かった！」

手渡された木製の槍を手に素振りを始めるが、やはり素人丸出しの力任せの素振り。

すぐに桔梗からの指導が入り、正しい握り方や構え方を教わる。傍から見れば微笑ましい師弟の姿だが、実はそうでもなかつた。

理由は桔梗が仕事をサボつてここにいるからで、書類仕事から逃げる為に指導をしているからだ。

この直後、仕事をサボつているのがバレた桔梗が文官に追いかけられ、手助けした一刀によつて横四方固めで捕縛された。

「お前、もうちょっと師匠をいたわれ！」

「断ります！」

旅へ

新たに恋が加わって、あつという間に三年の月日が経過した。

元々の素質の事もあり、三年の間に恋は急成長を遂げた。

まだ一刀には敵わないが、師である桔梗と紫苑、兄弟子である焰耶を圧倒するまでになつた。

「てえええいっ！」

「ふつ」

焰耶の渾身の一振りを軽く受け止め、さらに押し返す。

そのまま畳み掛けるように攻勢に出るが、焰耶も防御を固めて隙を窺う。

しかし、あまりの凄まじい猛攻で焰耶の方が先に参つてしまつた。

「ああ、また負けた！」

「でも焰耶も強くなつてる」

「負けた直後に言われても実感無いんだがな、それ」

真名まで交換するほど仲の良い二人だが、訓練になると毎回焰耶が兄弟子のプライドと意地をへし折られる。

最初の頃こそ焰耶が勝っていたが、今ではすっかり勝ち星の数が逆転してしまつた。

「ただいま。一人とも修行かい？」

修行中の二人の下へ、警邏から戻つた一刀が合流する。

するとすぐさま恋が引っ付き、負けじと焰耶も引っ付く。

双方とも見事な成長振りなので、引っ付かれた一刀としてはとても気分がいい。

その様子を離れた場所から眺めている桔梗と紫苑は、自分達も同じく引っ付きたい衝動を抑えて会話を続ける。

「相変わらず仲が良いわね、あの子達」

「いつもの事じやろう」

冷静に装つているが、二人は手にしている書類を提出するまではと耐えている。

彼女達が持つて いる書類は今日中に提出なので、遅れると政務に影響が出て しまう。

そうなつたら余計に忙しくなつてしまつたため、この場は我慢している。

どうにか堪えて移動する最中、紫苑は先だつて桔梗から聞かされた提案について訊ねる。

「やつぱり、旅に出させるの？」

「ああ。若いうちに色々な場所を見せて、あらゆる経験を積ませたい」桔梗が考えているのは、一刀達三人を余所へ旅立たせる事だつた。彼女自身も父親の紹介された先を旅し、あらゆる土地を見て回つた過去がある。

その時と同じく、いつまでも巴郡という狭い世界に閉じ込めていいで、もつと広い世界を見せてあらゆる経験を積ませたいと考えていた。

「行かせる宛はあるの？」

「親父殿の友はあらかた亡くなつたが、当時に知り合い、やり合つてから飲み仲間になつた奴らがいる。そいつらの下へ行かせるつもりじゃ」

その人物達も出世して結構な地位にいるそうなので、紹介状さえ書けば大丈夫だろうと桔梗は言う。

「そつか、だとしたら一刀君はここを何年か離れることになるわね」「そうじやのう。となると……」

「そろそろ手を出しておかないとね」

真剣な眼差しから一転、邪な眼差しで一刀を眺める二人。

それを察したのか一刀は悪寒を感じ、周囲を見渡す。

「にい、どうしたの？」

「何か獲物を狙う目で見られたような気が……」

一刀の言つて いる事の意味がよく分からず、恋と焰耶は不思議そうに首を傾げた。

外への修行の話はその日のうちにに行われ、引継ぎや知り合いへの挨拶もあるので出発は三日後となつた。

別々に送り出すか揃つて行かせるかの話も出たが、そこは恋が一刀から離れたくないオーラと視線により桔梗と紫苑を陥落させ、揃つて送り出す方向で落ち着く。

「行き先は天水と西涼ですか」

「うむ。気の良い奴らじやから、悪いようにはせんはずじやぞ」

紹介状の宛先は漢中の、天水の董君雅、西涼の馬騰。

双方とも桔梗が修業時代に出会い、一戦交えた後に酒を飲み交わして仲良くなつたそうだ。

以来すつかり飲み仲間で喧嘩仲間となり、滯在中は何度も戦つては酒を飲んで騒いだらしい。

なんとも桔梗らしい友人の作り方に、一刀だけでなく焰耶も苦笑いを浮かべる。

「お前達が抜けた分くらいはなんとかなる。心置きなく旅立つがよい」

「はい！」

こうして三人は修業の旅に出ることになつたのだが、この話を聞いて城勤めの人々が過剰な反応を見せる。

「そんな、呂迅君が旅に出るだなんて！」

「むさい男達の中の、唯一の癒しだったのに」

「修行中の魏延様の揺れる胸が見れなくなるのか……」

「恋ちゃん、美味しいご飯作つてあげるから、恋ちゃんだけでも残つて！」

一刀と恋に対する気持ちは分かるが、焰耶に対する気持ちはあまりにも邪なので、とりあえず焰耶はアホな発言をした兵士達を片つ端から教育的指導しておいた。

吹つ飛ばされた兵士達が放物線を描いて、山のように積まれた。

「この胸は一刀のだ！」

という発言を一刀に聞かれ、頭を抱えて悲鳴を上げるという自爆オチ付きで。

直後に逃げ出した焰耶は、もう一刀の嫁に行くしかないと激しく思ひ込んでいた。

同日の夜、桔梗と紫苑は意を決して一刀の部屋へと向かう。
勿論、夜這いのためだ。

「いざやるとなると、緊張するの」

「でもここを逃すと機会は無いわよ」

双方とも考え付く限りの誘う衣服を身に纏い、一刀の部屋へ向かう。

途中で擦れ違つた侍女が、自分とは比べるまでもない凶器とも言える姿を目にし、がつくりと膝を着いているのを二人は知らない。

「さて、いよいよじやな」

「そうね。最高の一夜に……あら？」

「む？」

一刀の部屋への最後の廊下を歩いていると、前方に人影を発見した。

暗くてよく見えないが、その人影も自分達と同じ方向に向かつている。

歩く速度を上げて近づくと、人影の正体がようやく見えた。

「焰耶。お前、何をやつておるんじや？」

「ふあっ！」

急に声を掛けられた焰耶は変な声を上げる。

「き、桔梗様に紫苑様でしたか。どうしたんですか？」

「それはこつちの台詞じや。お前こそ何をしておる」

追求の言葉に焰耶は視線を逸らし、気まずそうな表情で黙り込む。
なかなか答えないでの苛立ちを覚える桔梗に対し、紫苑は冷静に状況を判断していく。

時間は夜中で焰耶の格好は自分達ほどではないが、彼女の体型ならば充分にそそる格好。

それに進行方向の事を考えれば、答えはすぐに導き出せた。

「焰耶ちゃんも夜這い？ なら一緒に行きましょうか」

「ブウツ！」

「はっ！」

満面の笑みでの紫苑の発言に焰耶が吹いて桔梗が驚いた表情を浮

かべる。

「一刀君も大変ね、いきなり三人相手なんて」

まるで動じない紫苑に対し、桔梗と焰耶は動搖しまくりだつた。

このままでは収集がつかなさそうなのと、目的は同じだからという事で、紫苑は一人の襟を掴んで引き摺つていく。

「さあさあ、どうせなら皆で仲良くね」

「紫苑、こつちに来てから随分と強かになつたじやないのか？」

普段のお淑やかさをそのまま、内面が強かになつた友人に桔梗は恋は人を変えると初めて実感した。

その後、二人は解放され三人で移動してようやく一刀の部屋が見えてきた。

ところがそこにはもう一人、今にも一刀の部屋に入りそうな人物がいた。

「あら？」

「むつ？」

「あつ、恋だ」

焰耶の名前を呼ぶ声に気付き、枕を手にした恋が三人の方を向く。

「何をやつておるのじや、こんな夜更けに」

「にいと一緒に寝に来た」

勿論、恋の言う所の寝るは不純な意味ではなく、純粹に同じ床で眠る事。

そこに一切の邪な思惑や動機などは無く、眠そうな目がそれをより一層に引き立てる。

「「ぐはっ！」」

純粹な恋の一言と澄み切つたオーラに、不純な意味で一刀と寝に來た三人は精神的ダメージは受ける。

急に崩れ落ちた三人に、恋は眠い目を擦りながら首を傾げる。

三人の受けたダメージは予想以上に大きく、桔梗や紫苑でさえ立ち上がれずについた。

「わ、わしらは間違つておつたのか？」

「いいえ、一刀君への想いという点では間違つていないわ」

「では、何が」

「私達は手段を間違えていたのよ。一刀君への想いを伝えるなら、夜這いでなくてもいいのに」

紫苑の考えに桔梗と焰耶も心の中で同意した。

特に一緒に旅立たない桔梗と紫苑は、焦りがあるとはいえ早計過ぎたと自分を恨む。

「恋ちゃん！ 恋ちゃんのお陰で目が覚めたわ。だから私達も一緒に寝ていい？」

夜這いは諦めても添い寝は諦めない辺り、紫苑はしつかりしている。

「うん。皆と一緒になら、きっと心地いい」

にぱつと笑う恋に三人の表情も和やかになる。

既に夜這いの事など遠く彼方へ吹き飛び、四人は一緒に一刀の部屋へと入った。

まだ起きていた一刀も同意してくれたのだが、少々問題が起きた。部屋の寝床の広さで五人が寝るのは無理だった。

協議の結果、今夜は恋と桔梗、翌日の夜は焰耶と紫苑の順で添い寝をすることがなつた。

「どうか、何で一斉に来るんだ」

「よいではないか。師が弟子を見送るのに理由はいらん」

「恋はにいと寝たいだけ」

もつともな理由を口にする二人の意見を聞き、次いで紫苑と焰耶へ視線は移る。

「私は桔梗の付き添いよ」

「單に足が向いただけだ！」

余裕の笑みを浮かべる紫苑に対し、全く余裕の無い焰耶は顔を真っ赤にしてそっぽを向く。

照れ隠しなのは誰が見ても明らかに。

「安心しろ、焰耶。昼間の発言は真摯に受け止めるから」

昼間の焰耶の発言を持ち出して手をワキワキとさせる。

受け止めるの意味が違うと叫んだ焰耶は恥ずかしさを隠すように

悲鳴を上げながら、部屋へと逃げ帰った。

フォローするため紫苑も部屋を出ると、残る三人は床へ入る。

すぐに眠つてしまふ恋はともかく、一刀と桔梗は大変だった。

桔梗は理性を総動員して煩惱を押さえ込んでいる。

一刀も左右から襲い掛かってくる柔らかな感触に、必死で抗つて眠りにつこうとしている。

(これが生殺しというものかっ!)

(落ち着け落ち着け落ち着け。冷静に素数を数えるんだ!)

「すう……」

結局、一刀と桔梗が無事に眠りに着いたのはこの二時間後だつた。さらに翌朝になつて一刀は、今夜は紫苑と焰耶相手にあれを味わうのかと青ざめる。

昨夜でさえどうにかなりそだつたのに、二夜続けて耐えられるかどうか、正直自信が無かつた。

しかし時間は待つてくれず、遂にその時は来た。

若干恥ずかしそうにやつてきた紫苑と焰耶に挟まれると、一刀の理性は初つ端からクライマックスを迎えた。

(うおおおおおおおつ! 辛いけど、くつ付くなとは言いたくねえええええつ!)

煩惱を抑えるのは辛いが、柔らかい感触は男として氣分がいいので無下にできない。

ちなみに一刀を挟んでいる二人はといふと。

(あああああ。今すぐでも一刀君を脱がせて、体中をペロペロしたいいいいいつ!)

(近い近い近い近い! 一刀との距離が近すぎる。でも滅多に無い機会だし、ここはもつとくつ付くべきか? どうするどうする!) 外見は冷静を装つても中身は悶えている紫苑。

充分に踏み込んでいるのに、もつと踏み込みたいと思つてゐる焰耶。

どつちもどつちなのだが、同じなのは三人揃つて眠れない状況だという事。

一刀はどうにか寝ようとしているものの、二日続けてなので精神的にも限界ギリギリのところにいる。

必死に素数を数えようとしても、混乱し過ぎて単に奇数を数えていいるだけになるほどに。

(13、15、17、19、21!)

当然、眠れるはずも無い夜だけが更けていく。

翌朝には寝不足の三人組ができあがつており、あまりの有様に紫苑と焰耶は協定を破つて関係を持ったのかと桔梗に迫られた。

「なんか、この二日はやけに疲れたな」

「私もだ」

「?」

町の知り合いに挨拶へ向かう途中、一刀が呟いた言葉に焰耶は同意して恋は首を傾げた。

そんな日を送り、旅立ちの日が訪れる。

城門前には見送りに来た知り合いが大勢詰め寄つており、順々に一刃達に声をかけてくれる。

「呂迅君、本当に行っちゃうのね」

「ああ、たまに作ってくれた小龍包が……」

「それよりも背油ラーメンが！」

「何言っているんだ。唐揚げに勝るものは無い！」

暇を見ては、元の時代の食べ物を再現できないか試していた一刀。上手くできた時は暇だった兵士や侍女に試食してもらっていたので、彼らはすっかり餌付けさせていた。

「呂布ちゃんの食事姿が……」

「魏延様の揺れる胸——がふあつ!?」

同じように恋の食事姿に萌えた侍女が落ち込み、再度焰耶の胸を惜しむ兵士が焰耶のアツパーを浴びる。

ちなみに同意している男連中多かったので、彼は他の面々達の心の勇者と讃えられていた。

「では、行ってきます」

「道中は気をつけての」

「たまには連絡を頂戴ね。でないと、寂しくて追いかけちゃうから」
につっこりと笑う紫苑だが、実際にやりそ.udだと誰もが感じ取つた。

勿論、本人もそのつもりだ。

本当にそうなると大変なので、一刀は可能な限り連絡は取ろうと決心した。

「元気での」

「師匠も。飲み過ぎて体を壊さないようにしてくださいね」

「最後までそれを言うかつ!」

昨夜も送別会で同じ事を言われていたので、周囲からは笑いの声が上がる。

さらに一刀はちゃんと監視してくれるよう紫苑にも頼み、外堀を埋める。

「お前は鬼か！ 数少ない酒を制限するなど」

「師匠の体のためを思つての事です。俺がいない間に何かあつたら、どうするんですか」

純粹に桔梗の体を考えての発言だが、これを桔梗が盛大に勘違いした。

まるで妻を心配する夫のようだと脳内変換し、恍惚の笑みを浮かべる。

急に熱っぽい視線を向けられて戸惑う一刀。

この状況は紫苑が軽く当て身を入れて桔梗を正気に戻すまで続いた。

「いつてらっしゃい」

「呂迅君、早く帰つてきてね。それまでむさい男達の中で頑張るから！」

「呂布ちゃん、美味しいご飯たくさん作つてあげるから、いつ帰つてもいいのよ」

「魏延様。どうかご無事にお帰りになるのを、我々はお待ちしています。そしてまたあの揺れ——あべしつ！」

最後までアホな発言をした焰耶の揺れる胸派閥は全員殴り飛ばされ、鈍碎骨で叩きのめされそうになつた。

さすがにそれは拙いので、一刀が宥めて事なきを得る。
こうして一刀達の修行の旅は始まつた。

旅の出会い

見聞を広める為に桔梗の友人の下へ旅に出た一刀と恋と焰耶。

三人は最初の目的地である天水へ向かって、大陸を北上していた。

そうしてまず見えてきたのは、この大陸の現状だった。

桔梗の治めている巴郡は治安が良かつたのだが、そこから離れるほどに治安が悪くなっている。

これまでの盜賊退治でもそれは感じていたが、こうして旅に出て巴郡から離れるほどにそれを実感する。

「何やつてんだろうな。師匠のところ以外は随分と荒れているじゃないか」

愚痴を零す一刀達が現在いるのはとある町の飲食店。

店内は酔いつぶれた男性客が一人いるだけの小さな店。

店主である老夫婦が作る料理は可も無く不可も無くな無難味。

だが、治安の悪いこの町ではこの店が一番まともな味と値段で経営している。

値段は入つてから分かったが、味に関しては恋の嗅覚センサーが、この店が一番まともそうだと言っていた。

一番美味しそうではなく、一番まともそうという点がこの町の食糧事情を現している。

「……どうぞさよま

「もういいのか？」

普段よりずっと少ない量に焰耶が心配になるが、恋は大丈夫だと首を縦に振る。

「……それほどでもないから

恋が大食いするのは、あくまで味が良い事が前提にある。

不味い店は嗅覚で回避するが、さほどでもない店は例え量が足りなくとも、頼んだ品だけ食べて帰る。

巴郡ではそれが美味しい店を示すバロメーターになつており、恋におかわりしてもらえると店の料理人が歓喜していた。

「だよな。腕は悪くなさそうだけど、食材がな……」

「むしろこの程度の食材で、よくこの味にできたものだ」

この辺りは、食材すら碌な物が無い状況にある。

だからといって一刀達がどうにかできることではない。

できるのは遭遇した荒くれ者達を成敗することぐらいだ。

旅に出て早々、できないことの多さを実感しながら三人は店を出た。

「さて、今日もやるか？」

「……だな」

「やるしかない」

一刀の問い合わせに焰耶と恋も同意を示し、早々に町を出る。

そのまま北上しながら山を見つけると、そこへ入山した。

「じゃあいつも通りいこうか」

山へ入った三人は獸道を歩きながら、途中で見かけた木の実を採取していく。

さらに遭遇した鹿を狩り、川辺に運んで慣れない手つきで解体する。

解体した肉は大半を薄切りにして干し肉に加工。

残った肉と鮮度が落ちやすい内蔵類は、熱した石でしつかりと焼いていく。

「にい、まだ？」

「もうちよつとだ。生焼けだと怖いからな」

肉が焼ける匂いに恋が顔を近づける。

危ないので焰耶が首に巻いている布を引っ張つて止める。

「恋、まだ焼けないから、干し肉作りを手伝え」

「……ん」

名残惜しそうに背を向けて、肉を日当たりの良い場所へ干していく。

彼らは旅に出て以降、あまりに食事情が良くないので、こうしてサバイバルな食事をしている。

町で良い食事ができなかつた時も、こうして今回のように食後に食

料収集を行つて足りない分を食べている。

「ところで恋、これは大丈夫か？」

干し肉作りの最中、焰耶が木の実の一つを恋に差し出す。

恋はそれの匂いを嗅ぐと首を横に振った。

「そうか、駄目か」

香りで店の良し悪しを判断できる恋は、木の実が食用かそうでないかを嗅ぎ分けることもできる。

以前、首を横に振った実を一口齧つた一刀がしばらくトイレに籠もつた実例がある。

半信半疑だつた焰耶も同じ目に遭つて体重が二キロ減つた。

「まだ熟していない。後二日待つて」

「そつちか。なら手元に置いておこう」

このお陰でサバイバル食でも困る事無く、どうにか食べていてい
る。

そうしているうちに肉は焼け、辺りに良い香りが漂う。

「さつ、焼けたから食べよう」

「待つてました」

「いい匂いだな」

肉を干し終えた焰耶と恋も加わり、焼け石での焼肉が始まる。

途中で焼く速度が食べる速度に追いつけなくなるが、そこは木の実でカバー。

そして焼けた肉を再び食べ始める。

そうしてしばらく食事をしていると、どこからか茂みを搔き分ける音が聞こえた。

三人は咄嗟に武器を取り、それぞれ別方向を向いて警戒する。

口の中に残っている肉を咬んでいるのはご愛嬌だ。

「新しい獲物?」

「それだつたら嬉しいけど、盗賊だつたら即時殲滅だ」

「分かった」

新しい獲物を期待する恋に乗りつつも一刀が注意を促し、焰耶が頷く。

音は段々と近づいてきて、やがて一刀の正面に音の主が現れた。

「……お肉の匂い？」

現れたのはだらしない格好をしたドクロの髪飾りをしている戦斧を持つた少女。

両の頬には傷なのか痣なのか、髭のような線が一本ずつある。

フラフラと茂みから現れたその少女は、一刀の後ろで焼かれている肉に視線を固定してじっと眺める。

そして今度は一刀達に視線を移し、何かを視線で訴えるように見つめる。

次いで少女の腹から空腹を訴える音が聞こえる。

「えっと、お腹空いてるの？」

「うん」

問い掛けに小さく頷く少女からは、どことなく普段の恋と同じ雰囲気を感じる。

どこか眠そうな感じで保護欲をくすぐる妹的な感じに、兄魂を持つ一刀は逆らえなかつた。

「良ければ食べる？」

「食べる！」

力強く返事をした少女は勢いよく肉を食べようとするが、それを寸での所で止められる。

「……食べていいって言つたのに」

今にも泣きそうな表情で自分を止めた一刀を見る少女。

だが、止めたのにはちゃんと意味がある。

「まだ焼けてないから、もう少し待ちなさい」

「……はい」

まだ焼けていない肉を前に、少女は大人しく座つた。

とりあえずの場つなぎのために木の実をいくつか差し出すと、猛烈な勢いで食べ始めた。

どうやらかなりの空腹だつたようだ。

「ふう、ちょっと落ち着いた」

木の実を食べた少女は腹を撫で、改めて一刀達を見る。

次いで周囲を見渡し、首を傾げて尋ねた。

「嬉雨と桂香どこ？」

「誰だ！」

おそらくは真名で呼んでいるのだろうが、真名で呼ばうが名で呼ばうが誰なのか一刀達には分からない。

なのに少女はなんで、という表情を向けてくる。

そんな反応に天然なのか足りない子なのか、一刀は判断しかねる。そこへ、またも茂みを搔き分ける音が聞こえてきた。

今度は誰かを呼ぶ一人の少女らしき声付きで。

「香風、どこにいるのよ」

「食べ物見つけてきたから、出てきなさい」

「ん、こっち」

どうやら香風というのが少女の真名のようだ。

呼ばれた二人が木の実を抱えて姿を現す。

一人はウサ耳フードをかぶった気が強そうな少女。

もう一人はオデコと丸メガネが特徴的な少女。

二人は香風を見つけてほつとしたのも束の間、一刀達を見て思わず身構える。

「誰!？」

身構えた際に抱えていた木の実が落ち、辺りに転がる。

「それを聞きたいのはこっちも同じなんだけどな」

オデコメガネの少女の反応に焰耶が冷静に返す。

その後、木の実を貰い肉をご馳走になるところだつたと香風からの説明中、後から来た二人の腹からも空腹を告げる音が聞こえる。

恥ずかしそうに顔を逸らす二人に、一緒に食事をしながら自己紹介をしようと促した。

「俺は呂迅。こつちは従妹の呂布で、こつちは修行仲間の魏延だ」

肉を食べるのに夢中な恋と、火加減の調整に手こずっている焰耶に変わつて一刀が紹介をする。

名前を聞いた相手三人は、一瞬首を傾げるが気にせず自己紹介をする。

「アチシは荀攸よ。よろしく」

「むぐむぐ……徐晃」

「陳登……」

それぞれで自己紹介をしつつも、木の枝を削って作った箸は肉へ向かっている。

特に徐晃は恋と奪い合うように食べており、二人の間では静かに火花が散る。

「それで、お前たちは何でこんなところにいるんだ？」

ようやく火加減の調整を終えた焰耶が目的を尋ねると、代表して荀攸が答える。

「アチシと嬉雨——陳登は家出中なのよ」

「……なんだそりや」

今一つ事情が理解できないでいると、荀攸が詳しく説明してくれた。

荀攸はそれなりの家の出だが、後継ぎでもないので放置された。

なのに、後継ぎ予定の年下の叔母が生産性の無い恋愛しかできないと知るや、家の存続のためにと見合い話を次々と持ってきた。

しかも生まれた子はちゃんとした後継ぎである叔母の養子にするよう言われ、荀攸はキレた。

決して聞かない類の話ではないが、後継ぎでもないのに望まぬ結婚をし、腹を痛めて生んだ子供さえも取り上げようとする。

そんな実家のやり方に嫌気が差して家出したそうだ。

「アチシが後継ぎなら望まなくとも結婚ぐらい受け入れるわよ。そうでもないのに、誰が四十過ぎの肥えたおっさんの嫁になつて、生んだ子をアホな叔母さんに渡すかつての！」

箸をへし折りそうなほど強く握り締め、実家への恨みを思い出す荀攸。

それに力強く頷く陳登も、家出の理由を語りだした。

「ボクの場合は実家というか、お母さんが許せなかつたから家出したの」

陳登の母親は領内では指折りの政治能力を持つてゐる人物。

その母親を尊敬しつつ、自分には政治に關してそこまでの才覚がないのを陳登は自覺していた。

なので、別方面で母親のように活躍しようと思ふ幅広く勉強してみた結果、農政に道を見出した。

以来この道を究めようと研鑽してきたが、当の母親がそれを認めなかつた。

自分の娘なんだから同じぐらい政治の才能があるはずだと譲らず、何度話し合つても理解してくれなかつた。

さらには陳登が農政について学んだ事を記した木管を全て処分してしまい、それがきっかけとなり陳登は家出した。

「理解してくれないだけなら、まだ我慢できた。でも、ボクの努力の結晶を処分したのは許せない。これまで頑張ってきたのに、その証さえも認めないなんて……」

心底悔しそうに箸を握り締める。

尊敬していた人にそんな事をされちゃ、誰だつて怒るだろうと一刀と焰耶も思つた。

家出した二人は豫州内で出会つて意氣投合、荊州との境付近で修行の旅の最中に行き倒れていた徐晃を助けて仲間に加え、益州までやつて來たそうだ。

「徐晃は修行の旅をしていたのか？」

「ん。この斧をグルグル回して、空を飛ぶのが夢だから」

それは修行で身に着くのかと一刀と焰耶は心の中でツッコミを入れた。

「でも、なんでわざわざ益州まで？」

「実家から一里でも離れたかつたからよ」

「同じくお母さんの目と耳に届く範囲から、一里でも離れたかつたから」

そんな理由で益州まで來るのだから、大した家出根性である。

勿論、道中は決して楽ではなかつたそうだ。

盜賊に襲われると徐晃が撃退し、路銀が無くなりそうになると給仕

や臨時の日雇いで路銀調達。

どうにか自転車操業で回していたみたいだが、遂に手持ちの食料が尽き、盗賊に出会うのも覚悟で山へ食料調達に来たということだ。「で、徐晃が空腹で力尽きたから君達が食べ物を探しに行つて戻つたら、いなかつたと」

「そうよ。そんで探していたら、アンタ達に出会つたつて訳」

説明が終わる頃には焼き肉を食いつくし、全員が満足していた。

「ところで、呂迅達はどこに行くつもりなの？」

「師匠の友人の下で修行するため、今は天水に向かっているところさ」目的地を聞くと荀攸と陳登が反応を示す。

「そうなんだ。残念ね、天水は目的地候補の一つだつたんだけど」「ボク達はもう一つの候補だつた巴郡に向かうつもりなの」

今度はそれを聞いた一刀と焰耶が驚く。

つい先日まで滞在していた場所へ、目の前の家出娘が向かうというのだから。

「なんで天水と巴郡で巴郡を選んだんだ？」

気になつた焰耶が理由を尋ねると荀攸が説明してくれた。

彼女達は目的地選定の際に、いくつかの条件の下で候補を選んだ。まずは自分と陳登の実家と距離ができるだけ離れている事。

次いでしつかりとした太守か領主の下で治安が良い土地であること。

最後に、活躍できる機会がありそうな場所であること。

これらを踏まえて考えた結果、天水か巴郡が候補地に挙がり、最終的に活躍できる機会がありそだからと巴郡に決まつたそうだ。

「巴郡の方が活躍できる機会があると？」

「ボクと桂香は文官肌だからね。天水には賈駆つていう、知略に優れた人がいるらしいから」

「巴郡の方は腕利きの将が太守である嚴顥様を含めて五人いるけど、優れた軍師とかがいないみたいなの」

言われてみればその通りだと一刀と焰耶は思つた。

文官達の力量は決して能力が低い訳ではないが、かといって飛び抜

けて凄い訳でもない。

討伐の際の作戦も桔梗や紫苑を交え、話し合つて決めていた。

一応軍師らしき人もいるものの、所詮は文官の中できそくな人人物を当てたにすぎない。

本当の意味での軍師や参謀はいなかつた。

「だからこそ、そこで活躍して実家の奴ら、特にアホの叔母さんを鼻で笑つてやるのよ！」

「ボクは活躍しなくてもいい。好きなように農政に関わらせてくれるなら」

「香風も、喧嘩屋太守で有名な嚴顔様に修行をつけてもらえるなら、それでいい」

喧嘩屋太守という桔梗の二つ名にぴったりだと一刀は思った。焰耶も笑いを堪えている。

「なあ、他の四人の名前つて知らないのか？」

「知つてるわよ。情報収集に抜かりは無いわ！」

太守である嚴顔の側近を務めている弓の名手、一矢必中の黃忠。

嚴顔の弟子で身の丈ほどある大金棒を振り回す、強力金剛の魏延。

魏延の兄弟子で師の嚴顔も既に越えていると言われる逆手二刀使い、紅い旋風の呂迅。

そして呂迅の妹かなにかと思われる槍使い、疾風怒濤の呂布。

これに嚴顔を加えた五人が、巴郡の五本柱と呼ばれている。

自慢気に名前を挙げていったが、ここで荀攸は違和感を覚えた。

今言つた名前のうち三つを、聞いたような気がしたからだ。

そしてそれに真つ先に気付いたのは、恋と共に食後の休憩を取つていた徐晃だった。

「……五本柱の三人？」

徐晃の呴いた一言でようやく荀攸と陳登も気付いた。
名前を聞いた時に感じた引っ掛けかりの正体に。

「ああああああああ！　あなた達、呂迅と呂布と魏延だつたわよね

？　うわつ、何で気付かなかつたのアチシ！」

「……空腹は判断を鈍らせるつて、本当なんだね」

空腹に加えて目の前で焼かれる肉を前に、名前を聞いた時は気付かなかつた。

その事を荀攸は後悔し、陳登は気まずそうに俯く。

なんとも微妙な空気になつてしまつた中、徐晃が武器を手に一刀へ歩み寄る。

「五本柱最強の呂迅さん、どうか手合わせ願います」

挑む側だからだろうか、丁寧な口調で頭を下げてきた。

特に断る理由も無い一刀は、二つ返事で引き受けた。

「いいよ。ちょうどいい腹(ご)なしだ」

「ありがと」

河原の広めの場所で対峙する二人。

審判役は焰耶が務め、手合わせは開始される。

「では呂迅対徐晃、始めっ！」

熱男

旅先で出会った三人の少女。

そのうちの一人の徐晃から手合わせを求められ、応じた一刀。

審判の焰矢が開始の合図をすると同時に徐晃が先手を仕掛ける。

戦斧という重量のある武器にも関わらず、体のバネを生かした素早い動き。

この動きを見ただけで、一刀は徐晃の強さに期待を持った。

「ふつ！」

上段から一息で振り抜いた鋭い一撃。

とてもいい一撃だと思いながら、一刀は軽く避けた。

ところが、続けて繰り出してきた薙ぎ払いは大した攻撃でもなかつた。

「うん？」

不思議に思いつつも烈火で防御しつつ、懷へ飛び込んで紅蓮を振るう。

勿論、刃を反してあるので当たつても斬れはしない。

「むつ」

咄嗟に反応して回避した徐晃。

しかし、ここでも一刀は疑問を感じた。

回避行動に出る際の反応はとても良かつた。

それなのに、回避行動そのものにおける足捌きがまるでなつていない。

反応が良かつたから避けられはしたが、次の動作に繋がるものではない。

(これはひよつとして)

ある事に気付いた一刀はそのまま攻め込む。

徐晃は防戦一方になりつつも、隙を見て一撃を繰り出すが難なく防御され、そのままカウンターを浴びる。

そうなつたらもう成す術は無くなり、トドメに烈火を峰打ちで肩に

打ち込まれ、戦斧を落として膝を着いた。

「そこまで！ 勝者呂迅！」

思つたよりも呆氣ない幕切れに荀攸と陳登は目が点になる。

これまで町のごろつきや盗賊から自分達を守つてくれた徐晃があつさりと負けたのだから、驚くのも仕方が無い。

「嘘、香風がこんなにあつさり……」

「さすがは五本柱最強の人」

武術に関して素人の二人が一刀の強さに素直に尊敬の眼差しを送る。

しかし、武術を学んでおり徐晃の腕を直接体験した一刀の考えは違つた。

今的手合わせは、徐晃が負けて当然の試合だつたからだ。
「あのさ、ひよつとして我流？」

一刀からの問い掛けに徐晃は頷いて返す。

それを聞いて恋と焰耶もそういう事かと気付いた。

「どういう事？ 何で香風が我流つて気付いたの？」

訳が分からぬ荀攸が尋ねると、一刀達が解説する。

「正直言つて彼女は良い素質を持つていると思うよ。体格の割に力も瞬発力もある。でも、武術の基本がなつてない」

基本がなつていないと言われ、徐晃は少なからずショックを受けた。

「攻撃直後から次の攻撃への流れができてないな。だから、振り下ろしの後の薙ぎ払いが平凡以下な攻撃だった」

「足捌きも悪い。回避の後、反撃ができる動きじやない」

続けざまに焰耶と恋からもダメ出しをされ、徐晃はがっくりと俯く。

これまでに出会つた盗賊や町のゴロツキには勝つていたので、少なからず自信はあつたのだが、それをへし折られた。

フオローしようと旅中での盗賊との戦いの事を陳登が指摘すると。「その程度の奴なら通じただろうけど、一流の武人には今の手合わせみたいにあつさり負けるよ。持つて生まれた才能だけで戦つている

ようなものだから」

トドメの一撃を一刀から受けた徐晃は膝を着いて崩れ落ちた。

確かに誰からも教えは受けていなかつたが、なまじ負けていなかつただけに自信を持つてしまつていた。

後は夢である斧での飛行ができるように、名のある人の下でこれまでのよう精進を重ねればいいと思つていた。

ところがそれは大きな勘違いだと気付かされた。

唯一の救いは、素質はあると言われたことだけだった。

「うぐう……」

普段はあまり感情を表に出さない徐晃は、初めて悔しさを露にしていた。

あまり頭が良くないと自覚している彼女にとって、武術だけが唯一の道だつた。

我流とはいえ野生動物や暴漢を倒せていたので自信を持つて、斧による飛行という夢のため修行の旅に出た。

その自信が全て幻想だという現実を突きつけられ、悔しさを出さずにはいられなかつた。

「でも、さつきも言つたように素質はあるんだ。師匠の下で修行すれば、すぐに強くなれるさ」

最後に一刀が慰めの言葉をかけると、徐晃は顔を上げて本当かと目で訴える。

「慢心せず、一生懸命に打ち込めばね」「……頑張る！」

希望が見えた徐晃は立ち上がりて新たな決意を固める。幻想ではなく本当の強さを手に入れたいと。

「じゃあ早速師匠に紹介状でも、と言いたいところだけど」

一刀が言葉を濁した理由は誰もが分かつていた。

手元には文を書く物が何一つ無く、山中なので物を売っている店もない。

付近の町へ行けばあるだろうが、ぼつたくられるのが目に見えている。

「この辺りでまともな商売をしていそうな場所というと……」

「近くでまともに機能しているのは漢中ぐらいかしら」

漢中ならばそう遠くないものの、一刀達の旅のルートからは少し外れることになる。

「漢中に寄るとなると、到着が数日遅れそうだな」

別に到着日を約束している訳ではないので、数日遅れること自体は問題無い。

道中の食事も訓練を兼ねて狩りをすればいいし、盗賊に遭遇しても戦力は揃っている。

「なら大丈夫だろう。君達もそれでいいかい？」

「アチシは文句は無いわ」

「右に同じく……」

「平氣」

三人が同意してくれたので、一行は進路を変更して漢中へと向かう。

その道中で旅をした地の情報を交換し、各地の現状を知っていく。貧しくギリギリの生活を強いられている場所が広い範囲にあり、まともなのは極一部の領地だけ。

そこへ余所の領民が移るものだから、別の領地の太守などがいいがかりを付けて攻め込む。

これにより各地で紛争が勃発し、盗賊に身を落とした輩の事もあって、どこも大変なのだそうだ。

同じように別の領地から多数の移民が来たことがきっかけで、一刀達も戦闘をした事がある。

勝利を納めてその地も管理することになつた際、桔梗は余計な仕事をが増えたと嘆いていた。

「そうやって領地が増えたせいで、細かいところに手が回らなくなつて崩壊した場所もあるわ」

領地が増えたのはいいが、それを任せられる者が育つていなかつたり、任せたら任せたで不正の嵐になつたり。

その対応に苦慮しているうちに、今度は元々の領地への対応が疎

かになり、結果的に治安が悪化する例もあるそうだ。

「厳顔様のところはそういうのは？」

「亡くなつた師匠の父親が人材育成に力を入れていたみたいでさ、人材には少し余裕があるんだ」

そしてその抜けた穴は経験の浅い者を入れ、今後のために鍛えていく。

「そういう育て方つて、人材に余裕が無いとできないよね」

「しかも育成だから、時間がかかるんだよな」

それでも、余所に比べればずっとまとまに機能している。

経験が足りないだけで能力は鍛えられているので、ミスをしても混乱が少なく済んでいるお陰だ。

普段は文句を言いながら机仕事をしているにも関わらず、締める所は締める桔梗らしい仕事ぶりが發揮されている。

「その分、外部から来た人には相応の能力か素質が求められるけどね」
育成を主にしているだけに、外部から来た人材にはより高い能力か素質を持つ若者が求められる。

これはいつの世も同じだつた。

「だから頑張つてね、三人とも」

「やつてやるわよ。アホな叔母さんを鼻で笑つてやるためにも！」

「農政なら誰にも負けない自信がある」

「頑張る。いつか空を飛ぶためにも」

徐晃のは難しいんじやないかと思いつつ、その事を一刀も焰耶も口にしなかつた。

恋に至つては本気にしており、頑張れと励ましている。

そんなやり取りをしながら数日歩き続け、ようやく一行は漢中に到着した。

「これは思つたよりも活氣があるな」

町中に入つて受けた印象はそれだつた。

「こつちでは変わつた医術があるそうだけど、その影響かしら」

その話を聞いたことが無い一刀達がどんな医術なのかと尋ねると、雄叫びを上げながら輝く鍼を刺して治療するそうだ。

本当にそれは医術なのかと、未来の医術を知る一刀は不安に思つた。

鍼治療なのはともかく、叫ぶのと輝くのは何か変な宗教紛いの行為なのではないかと。

勿論、そんな事は情報を仕入れた荀攸達も信じきっていない。そこへ。

「元気になれえええええっ！」

本当に雄叫びが聞こえてきた。

気になつた一行が人ごみのできている場所へ向かうと、民家の赤毛の男が床に伏せており、治療を終えた後の男性の顔色は幾分マシになつていた。

「これで良し。だいぶ良くなつたから、明日もう一回治療をすれば完治するだろう」

「ああ……華佗先生。ありがとうございます」

満足気に立ち上がる男に病の男が礼を言う。

それを見届けた野次馬達も、さすがは先生だと人々に褒め称えている。

「ほ、ほらね」

「……本当だつたんだ」

初めて見た医療行為に啞然としている一刀達を残し、周囲の人々は散つていった。

民家を出ようとした華佗と呼ばれた男は、突つ立つて居る一刀達に気付き話しかけてきた。

「やあ、俺に何か用か？」

爽やかな笑みで話しかけられ、一刀達はようやく意識が戻つた。

「い、いや、変わつた医術だなつて」

「お前達は余所から來たばかりか？　いやあ、俺も最初の頃は回りに疑いの眼差しで見られたもんだ」

当然だなど誰もが思つた。

「おつと、紹介が遅れたな。俺の名は華佗！　病魔と闘う五斗米道の

継承者！ 夢は大陸全ての病を治す事だ！」

自身の夢を叫びながらポーズを決めた華佗を見て一刀は思った。

この人は痛い系の人か中二病患者なのではないかと。

他人の治療よりも、この人の治療の方が先なのではないかとも。

「「、「ごどぅえいどぅ？」」

「違う！ ゴットヴェイドオーだ！」

華佗は発音の違いを指摘し、何故かポーズを決めて正しい発音を聞かせる。

「「、「ごどべいとう」」

「「、「ごとうえとう」」

「違う、違う、違ああああうつ！」

誰一人正しい発音をしないので、顔を激しく左右に振つて発音の違いを叫ぶ。

「ゴットヴェイドオーだろ？」

周囲が上手く発音できない中、一刀だけが正しい発音をする。

それを聞いた華佗は一刀の手を握つて叫んだ。

「友よ！」

一刀の華佗に対する印象はこれで固まった。

暑苦しい痛い系の男と。

「いやあ、すまんすまん。同じ医術を使う仲間以外で、まともに発音できる奴には会つたのは初めてだつたんだ」

「別に友人ができるくらいは構わないんだけどさ」

ツテや人脈は広い方がいいので、友人を作る事自体は決して悪くない。

問題は、その友人がどういう人物なのかだ。

人物的に見れば華佗は良い人物。

暑苦しい部分こそあるが、やつていることは善行で理想も高い。

おまけに治療の実績も残しているので、縁を作つておいて損は無い。

知り合いが病気になつたり、自分達が怪我をした時に治してもらうためにも。

「それにもしても、大陸全ての病を治すだなんて」

「無謀な理想だというのは分かつていて。でもだからこそ、挑んでみる価値があるんだ」

「その意気込みは分かるな」

誰でも高い理想に挑む気持ちを一度は持つたことがある。

なので、無謀だとは思つても決して馬鹿にはしない。

「どうで、さつき鍼を光らせていたけど、あれはどうやつているんだ？」

実際の治療を見て目の当たりにした、治療に使う鍼が輝いている様子。

あれがどういう仕掛けなのか気になつた一刀が仕組みを尋ねる。

「あれか。あれは氣を鍼に集中させていてるんだ。その氣を病魔にぶつけ、退治して治療するのが五斗米道の治療法なんだ」

説明を聞いて氣功療法のようだと一刀は思った。

「氣つて何？」

「氣というのは誰の体にも流れている力で、一部の武人はこれで体を強化したり氣を飛ばす遠当という技を使うらしい」

恋からの質問に華佗が答えると、武の道を行く一刀達四人が反応する。

特に遠当てという技は、牽制や遠距離攻撃も使えるという意識を相手に持たせられる。

戦う術を増やし、戦術を広げる意味ではとても役に立つ。

「氣つて、俺達でも使えるようになるか？」

「俺は戦いに使う術は知らないが、氣の扱いについてなら教えられることにした。教えてやろうか？」

「是非」

「その前に嚴顔様への紹介状書いてくれない？」

氣は教わりたいが、先に約束をしたのは荀攸達の紹介状なので、そちらを優先することにした。

必要な物を揃えて桔梗への書を書き、手渡す。

「じゃあ早速、巴郡へ向かいましょう」

予定に無い遠回りをしたので、早く巴郡に行きたい荀攸が陳登と徐晃を急かす。

せわしない様子に陳登は溜め息を吐き、徐晃は気にはせず頷く。

「徐晃は氣を教わらなくていいのか？」

「二人の護衛が優先。それに私にはまだ早いと思う」

徐晃としては桔梗の下で腕を磨いた後、修業を終えて巴郡へ戻つた一刀達に教わるつもりでいる。

今の自分に必要なのは氣ではなく、全く身についていない基本を学ぶ事だと自覚している。

優先する順番としても間違つていないので、一刀達は納得して短い旅の仲間三人を送り出した。

「さて、じゃあ氣を教えてくれないか？」

「その前に一つ聞きたい。お前達はしばらくここに滞在するのか？」

実は華佗も病魔を探しながら町から町へ旅をしているらしい。

今は知り合いの鍛冶屋に鍼を鍛えなおしてもらうために漢中を拠点にしているが、そろそろ旅を再開するつもりだそうだ。

「できれば早めに天水へ行きたいんだけど」

それを聞いた華佗は笑みを浮かべた。

「なんだ、だつたら道すがら教えてやるよ。俺も次は北のほうにいる病魔を探そうと思つていてな」

幸運にも進む方角が同じだつたので、一刀は一時的に華佗を仲間にすることにした。

恋も焰耶も氣を覚えたいのでこれに同意した。

同時に、仲間に医者が加わったのを心強く思つた。

「けれど、明日までは待つてくれ。さつきの病人に最後の鍼を打つてやらなきやならないんだ」

勿論これにも同意し、一刀達は華佗が泊まっている宿に一泊することにした。

翌日、最後の治療を終えて完治したのを確認した華佗を仲間に加え、一刀達は改めて天水への旅を再開した。